


942  
Sc 5  
3

942-Sc5-3ウ  
  
1200500760138


〇  
複写



始







岩波文庫

320—321

ア ナ ト ル

作ラツ ッニユシ  
譯隆豊宮小

岩波書店





942  
Sc5  
3

巖波文庫

318-319

ア ナ ト ル

シ ユ ニ ッ ツ ラ 作  
小 宮 豊 隆 譯



巖波書店





譯者序

『アナトール』は一般に、主人公アナトールの甘い軽い然も倦怠と憂鬱との色をませた戀愛三昧の描寫を主眼とする、デリケートな一幕物の群れだと考へられてゐる様である。

譯 然し作者は單にそれのみでなく——換言すれば、作者は單にさういふ戀愛三昧が醸し出す情趣

の世界のみではなく、寧ろさういふ戀愛三昧を通して現はれる人間の心の種種相に興味を持つて、是を書いたものの様に私には思はれる。例へば『アナトール』の中に動いてゐる特殊な情趣に不満を持ち、『アナトール』の中に動いてゐる特殊な人物に輕侮を禁じ得ない様な人でも、その情趣や人物に拘泥する事なしに、其所に開展される諸々の心の姿をじつと見成る丈の餘裕さへ持ち得るならば、假令その觸發の機縁は違ふとしても、嘗て自分の經驗したさまさまな心が、其所に細かに又素早く捕捉され、且つ穩やかに然し皮肉に批評されてゐる事を發見するに違ひないからである。即ち此所では人間の心の種種相が、戀愛三昧を通して現はされてはゐるが、然もその多くものは、それぞれに、戀愛三昧を超えて普遍的なものに繋がり得る、パースペクチヴを持たされる。

569-14



然し私が今、十四五年も前に『新小説』で公けにした此翻譯を、新に推蔽して更に公けにする氣になつたのは、もう少し、外にも理由がある。——それは、私が大正十三年（西曆一九二四）の春、暫く埃地利の維也納に足をとめて、維也納および維也納人の中に、最も濃厚に『アナトール』を感じたからであるに外ならない。

ルドルフ・ハンス・バルチュはその小説『異教主義』の中で、二人の人物の口を通して、普魯西亞人と埃地利人との性格氣質の相違を述べてゐる。バルチュの理解した埃地利人の中にも、我我は正に多量の『アナトール』を感じるけれども、然し一旦維也納を見、維也納人に觸れて見ると、その相似の如きは全然問題にならなくなつて了ふ。それ程濃厚に『アナトール』は、維也納及び維也納人の中に生きて動いてゐるのである。

勿論千九百二十四年の維也納及び維也納人は、戰敗後の疲弊の爲に、千八百九十二年の『アナトール』の世界よりも、遙に汚れ且つ荒れて感じられた事は争はれない。然し、觸りの柔らかな、氣の弱い、線の細い、善い意味にも悪い意味にも傳統的な、さうして世紀末的で都會的で、清新な強健な自然の代りに快適ではあるが虚弱な人工しか持つてゐない——さういふ感じを與へる維也納及び維也納人の世界は、同時にまた『アナトール』の中のアナトールの世界である。維也納及び維也納人は、アナトールの愛すべきが如く愛すべく、アナトールの輕蔑すべきが如く輕

蔑すべく、アナトールの頼りにならない如くに頼りにならない。『アナトール』は維也納及び維也納人の象徴であると言ひたい位である。

シュニッツラが『アナトール』によつて、意識的に、維也納及び維也納人の文化史的斷面を描き上げようとしたものであるかどうかは、私には分からない。寧ろ此所では維也納生れの作者が箇人の心理現象を如實に細緻に捕捉する事を目的とした結果が、偶然に、維也納及び維也納人一般に共通する特殊な心理現象の描寫となつて現はれたと見る方が、より適切な想像でありさうにも思はれる。然し、假令作者が意識しなかつたにしろ、既にその作品の中にさういふ特別な光景が宿つてゐる以上、さうしてさういふ特別な光景をも併せ眺める事がその作品に對する我々の興味を増大する所以である以上、我我は何に遠慮してその光景を眺めずに置く必要があるだらう。事實また、『アナトール』の様な作品は、維也納からでなければ、また維也納人の中からでなければ、決して生れるものではないといふ様な意見は、既に獨逸の文學史家によつて、幾度も繰返されてゐる所なのである。

もつとも、獨逸の文學史家の説を逆に用ひようとする様な、この視點は、純粹な藝術的な立場から言へば、或は許容され難い視點であるかも知れない。然し若しさういふ純粹な藝術的な立場のみから言へば、今の私は、此翻譯に推蔽を加へて改めて公けにする氣に、或ひはならなかつた



6  
かも知れない。畢竟私は此の翻譯を、私の維也納及維也納印象記として世の中に提出する事に、  
最も多くの興味を見出してゐるのである。

昭和三年三月

目　次

運命にかける問ひ	九
クリスマスの買物	三七
挿　話	六一
記念の寶石	九一
別れの晩餐	一〇五
末期の苦しみ	一三七
結婚式の朝	一六一



運命にかける問ひ





人物 アナトール

マクス

コーラ



アナトールの部屋

運命にかけかひ問

マクス アナトール、まったく、君は羨ましいよ……

アナトール (微笑してゐる)

マクス 白状すると、ね、僕ぎよつとしちまつたよ。なにしろみんな可い加減な出鱈目だと計り  
思つてゐたんだからな。ところが現在見てみると……あの女が僕の眼の前で睡つて了ふ……お前

は踊子だと言はれると踊り出す、お前の戀人は死んだんだよと言はれると泣き出す、お前は女王  
だと言はれると罪人を赦してやる……

11 アナトール うん、うん。



マクス 何だか君の中には魔法使が住んでゐる様な気がする！。

アナトール 誰の中にもゐるんだよ！。

マクス 氣味がわるいな！。

アナトール 僕はさうは思はない。……それが氣味が悪いなら、人生其物だつて氣味が悪い。人間が何百年となくかかつてやつと氣のついた色んなことだつて氣味が悪い筈だ。僕等の祖先が藪から棒に、地球は廻つてゐると聴かされた時、どんな氣がしたと思ふ。みんな屹度目が廻る様な氣がしたに違ひない！。

マクス うむ……でもそれはみんなに關係のあることだからな！。

アナトール それから假に今初めて春が発見されたとしたら！。……是もまた屹度みんな信じてゐることが出来ないに違ひない！。いくら樹が芽を吹いても、花が咲き盛つても、戀が湧き立つても、マクス そりや君いけないよ、そんな事は證明にやならないよ。このマグネティズム（磁力）なるものは……

アナトール ヒュブノティズム（催眠術）だよ……

マクス いや、そのそれは全く別なものだよ。どんなことがあつたつて僕は催眠術はかけさせない。——

アナトール 馬鹿だな！。なんでもないぢやないか、僕が君を眠らせる、君は大人しく眠つてゐる。

マクス さうさ、さうして君が「あなたは煙突の掃除人ですよ」と言ふと、僕は煙突の中へ下りて煤だらけになるんだらう！。……

アナトール まあそんな冗談は措いて……此事の値うちは科學的に活用の利く點にあるんだよ。

——然しさうはいつでも、大したことも出来ない。

マクス といふのは……？。

アナトール さ、僕がだぜ、今日あの女を色んな世界へ連れて行つてやることの出来た僕が、どうしたら自分を外の世界へ連れて行くことが出来る？。

マクス そんなこと出来ないことなのかな。

アナトール 打明けたところ、是まで僕は幾度もやつて見たんだ。僕は此ダイヤモンドの指環を幾分も凝と見詰めて、自分にサジェスチョンを與へた。アナトール！。眠れ！。お前が眼を覺ましたら、お前を氣狂ひのやうにするあの女のごとは、お前の胸から消えて了つてゐるだらう。

マクス それで、眼が覺めたら？。

アナトール 覺めるどころか、僕は眠りもしなかつたんだ。



マクス あの女……あの女？……ちやまだやつぱり！

アナトール さうだよ、君！……まだやつぱりだよ！。僕は不幸だ、僕は氣が狂ふ。

マクス ちやまだやつぱり……疑つてゐるのか。

アナトール いや……疑つちやゐない。あの女が僕を欺してゐるといふことは僕には分つてゐる！。あの女が僕に肩をつけてゐるときでも、あの女が僕の髪を撫でゝゐる時でも……二人で歡樂の限を悉してゐる時でも……あの女は僕を欺してゐるのだといふことは僕には分つてゐる。

マクス 妄想だよ！。

アナトール さうぢやない！。

マクス ぢや其證據は？。

アナトール 僕は曉るんだ……感じるんだ……だから僕には分つてゐるんだ！。

マクス 大變な論理だね！。

アナトール ああいふ女といふものは必ず實を立てないものなんだ。それがあの手合には丸で當り前のことになつてゐる……當人はそのことに丸で氣がつかない……僕が二冊三冊の本を同時に讀まなけりやゐられないと同じ様に、あの手合も二人や三人の男を持つてゐなけりやゐられないんだ。

マクス 然しあの女は君を愛してゐるのぢやないか。

アナトール 無限に……然しそんなことは問題にならない。あの女は僕に實を立てない。

マクス それぢや誰と？。

アナトール それを僕が知るものか。あの女を往來で躡けた公爵かも知れない、あの女が朝のうち、前を通ると窓越しに會釋をした郊外の詩人も知れない！。

マクス 君は馬鹿だよ！。

アナトール そんならあの女が僕に實を立ててゐないのぢやないといふ理由があるのかい。あの女は、外のどの女とも同じ様に、人生を愛して然も考へるといふことをしない。お前は俺を愛してゐるか、と僕が訊く——すると女はえゝと言ふ——さうして女は本當のことを言つてゐる。又、お前は俺に實を立ててゐるのかと僕が訊く——すると女は又えゝと言ふ——さうして又女は本當のことを言つてゐる。女は決して外の男のことを考へてゐやしないんだから——少くともその瞬間は。それぢや君に訊くが、妾は貴方に實を立てちやゐないんですよ、といふ様な事を君に言つた女が今までのうちにあつたかい？。そんな事言はないとすれば、確かなことを何所から持つて来る？。假にあの女が僕に實を立ててゐるとしても——

マクス 然しそりや！。——



アナトール　そりや極めて偶然なことなんだ。……あの女は決して考へない。妾はあの方の爲に愛するアナトールの爲に、實を立て通さなくてはならない……とは決して考へない……

マクス　然しあの女が君を愛してゐさへしたら？

アナトール　君も随分お人好しだよ！。そんな事が理由になるものなら！。

マクス　それで？

アナトール　僕はなぜあの女に實を立てない？……然かも僕は慥かにあの女を愛してゐる！。

マクス　そりや君！。男は！。

アナトール　古臭い愚な言草だよ！。何時でも男は、女はその點で我我とは違ふと云ふことで安心してゐようとする！。そりや違ふのも随分ある……母親から閉ぢ籠められてゐる女とか、丸で情合のない女だとか。……然かし外は男も女もおんなしだよ。僕が一人の女に、私はお前を、お前丈しか愛してゐないと言ふとする——其時僕は、假令僕がその前の晩外の女と一緒に寐てゐたとしても、その女をだましてゐるのだとは感じない。

マクス　さうさ……君はね！。

アナトール　僕は……さうさ！。さうして君はさうぢやないとでも言ふのかい？。さうしてあの女は、僕の崇拜するコーラは、さうぢやないとでも言ふのかい？。ああ！。考へると氣が狂ひさ

うだ。あの女の前に跪坐いて、ね、おい——どんなことでも前もつて赦して置くんだから——いいかい、本當のことを言ふんだよ、と言つたところで——それが何になると思ふ？。あの女はいつもの通りに嘘をつく——僕はいつもの通りに一歩も踏み込めない。僕だつて女から頼まれたことがないぢやない、「どうかお願いだから！。言つて下さい……貴方は本當に妾に實を立ててゐるのですか？。さうでなくつても、妾は決して怒りやしない、ただ本當のことを！。是非本當のことが訊きたいのです」つて。……それに僕はどう言ふ返事をしたと思ふ？。嘘をついたんだ……落つて、にこにこしながら……些しも疚しいと思はずに。女を悲しませる必要が何所にあると、僕は其時考へた。さうして僕は言つた。立ててゐるとも！。死んでも渝りはしないと。女は僕を信じた、さうして幸福だつた！。

マクス　そこで！。

アナトール　然し僕は信じない、だから幸福であり得ない！。此所に若し何か嘘のつけない器械の様なものでもあつて、その力でかういふ馬鹿な可愛い憎らしい生き物に口を利かせる様にするか、それでなけりや何とか外の方法で旨く本當のところを捕まへるか、どつちかでない限り、僕は幸福になりやうがない。……ところが世の中には偶然以外には何の方法もない。

マクス　ぢや催眠術は？



アナトール えつ。

マクス ね……催眠術は……といふのは、君があんな女を眠らせるのさ、さうして、お前は俺に本當のことを言ふんだぞ、と言ふのさ。

アナトール ふむ……

マクス 是に限るよ。……え……

アナトール 變だな！……

マクス 變だつてやらなくつちや。……さうして君がどし／＼訊いて行くのさ。……お前は俺を愛してゐるか？。……外に男があるのか？。……お前は何所から来た？。……何所へ行く？。

……お前の男つてのは何といふ？。……なんてつて。

アナトール マクス！、マクス！。

マクス え……

アナトール 君の言ふ通りだ！。……魔法使になれるんだね！。魔法を使つて女の口から本當の事が引き出せるんだね……

マクス どうだい？。君は救はれたらうが！。コーラはメデイウムとして屹度適任であるに違ひない……今夜にでも君は知ることが出来る、欺されてゐるのか……それとも……

アナトール それとも拜まれてゐるのか！。……マクス！。……僕は君にかじりつくよ！。……僕は重荷を下ろしたやうな気がする……僕は丸で違つた人間になつた。僕はもうあんな女を思ひの儘にすることが出来るんだ……

マクス まつたく見てゐたいね……

アナトール どうして？。君は疑つてでもゐるのか？。

マクス なるほどね、傍の者は疑ふことを許されないんだね、唯君だけが……

アナトール その通りだよ！。……妻君が情夫と一緒にゐる所を今見つけて家を飛び出した所天があるとする、其所へ友達がやつて来て、君の妻君は男を拵らへてゐるやうだぜと言ふとする、その時所天は僕はたつた今それを見届けて來ましたと答へはしまい……それどころか、馬鹿野郎と言ふだらう……

マクス さうだ、僕は丸で忘れてゐた、友人としての第一の義務は——友人の夢に手をかけないことだつた。

アナトール ちよつと。

マクス なんだい？。

アナトール 君にはあんな女が聴こえないのか？。僕は玄關で響いてゐる時でも、足音が分かる。



マクス　僕にはなんにも聞こえない。

アナトール　もうあんなに近かよつた！。……廊下だ……（扉を明ける）コーラ！。

コーラ　（外で）今晚は！。あら、ひとりつきりぢやないのね……

アナトール　マクスさんだよ！。

コーラ　（這入りながら）今晚は！。まあ、灯もつけずに……

アナトール　だつて、まだ薄ら明りがあるのぢやないか。俺は是が好きなんだよ、知つてゐる癖に。

コーラ　（彼の髪を撫でながら）私の可愛い詩人さん！。

アナトール　俺の大好きなコーラ！。

コーラ　でも私灯がつけたいな。……可いでせう。（燭臺の蠟燭へ火をつける）

アナトール　（マクスへ）美しいぢやないか？。

マクス　おやおや！。

コーラ　それで、いかが、アナトール——マクスさん、あなたは？。あなた方はもう長いことお話してゐらして？。

アナトール　三十分ぐらゐる。

コーラ　さう。（帽子と外套とを脱ぐ）そしてどんなことを？。

アナトール　色んなことを。

マクス　催眠術のことを。

コーラ　あら、また催眠術！。ほんとに今に催眠術のことで気が遠くなつて了ふわ。

アナトール　それでね……

コーラ　ね、アナトール、あなた一遍私に催眠術をかけて呉れない。

アナトール　私が……お前に……？。

コーラ　え、私随分面白いだらうと思ふわ。もつとも——あなたがかけるのよ。

アナトール　難有う。

コーラ　外の知らない人だつたら……いや、いや、可厭なこつた。

アナトール　それぢやね、おい……かかりたいのなら、かけて上げるよ。

コーラ　いつ？。

アナトール　今！。すぐ、この場で。

コーラ　え！。可いわ！。どうすりや可いの？。

アナトール　どうもしなくつても可いま、ただちつとこの椅子（チェア）に掛けてゐて、睡らうとする好意



さへ持つてりや可い。

コーラ あら、好意なら私持つてよ！。

アナトール 私がお前の前にかうして坐る、お前は私を凝と見るんだ……さ……私を御覽。私はお前の額の上から眼の上を撫る。かういふ風に……

コーラ え、可いわ、それからどうするの……

アナトール どうもしくつても可い。……唯睡らうと思はなけりやいけない。

コーラ ねえ、貴方がさういふ風に眼の上を撫つてみると、わたし随分妙な氣持がして來るわ。

アナトール 大人しく……口を利くんぢやない。……眠るのだ。お前はもう随分疲れたらう。

コーラ いいえ。

アナトール さうだらう！……少しは疲れたらう。

コーラ 少しは、え……

アナトール ……お前の眼蓋が重くなる……非常に重くなる、お前はもう手を上げることにも出來ない……

コーラ (小聲で) 本當だ。

アナトール (なほ女の額の上眼の上を撫で續けながら、一本調子に) 疲れて……お前はひどく

疲れてゐる……さ、おやすみ。……おやすみ。(彼は、驚いて眺めてゐるマクスの方を振かへり、誇らしげな顔つきをする) 眠るのだ。……もう眼がすっかりつぶれて了つた……お前はもう眼をあけることが出來ない……

コーラ (眼をあげようとす)

アナトール 駄目だよ。……お前は眠つてゐる。大人しく眠り續けてさへみれば可い。……さうだ……

マクス (何事か訊かうとする) 君……

アナトール 靜かに。(コーラに) ……眠るのだ……ぐつすり、しんから眠むるのだ。(彼はコーラの前に暫く立つてゐる、コーラは靜かに息をして眠つてゐる) よろしい……さ、君、訊いても可いよ。

マクス 僕はただ此女が本當に眠つてゐるかどうかが訊きたかつたんだ。

アナトール だつて君は見てゐるぢやないか。……兎に角、少し待つてゐよう。(彼は女の前に立つて、女を靜かに眺める。長い間) コーラ！……お前は是から私に返事をするのだぜ。……返事を。お前の名は何といふ？。

コーラ コーラ。



アナトール コーラ、私達は森の中にある。

コーラ あら……森ね……綺麗なこと！。樹が蒼蒼して……鶯がゐるわ。

アナトール コーラ……お前は是からどんな事でも本當の事を言ふんだぜ。……コーラ、お前は是から何をやる？。

コーラ 私は是から本當の事を言ひます。

アナトール お前はどんな事を訊いても有の儘に返事をするのだよ、さうして目が覺めたら、何もかも忘れて了ふのだよ！。分つたかい。

コーラ ええ。

アナトール さ、眠るのだ……靜かに眠るのだ。(マリスに) ぢや是から僕が訊いて見る……

マクス 君、一體此女は幾つなんだい？。

アナトール 十九さ。……コーラ、お前は幾つだ？。

コーラ 二十一。

マクス はは。

アナトール シッ……まつたく素晴らしいぢやないか。……是で君にも分かるだらう……

マクス 可哀想に、もし此女が自分でこんなな好いメデイウムだと知つてゐたら！。

アナトール 暗示が利いたんだよ。さあもつと先きを訊かう。——コーラ、お前は私を愛してゐるか……？。コーラ……お前は私を愛してゐるか？。

コーラ ええ！。

アナトール (勝誇つて) どうだい？。

マクス ぢや今度は、根本問題を、此女が實を立ててゐるかどうかを訊いて見たまへ。

アナトール コーラ！。(振返つて) 此問ひは愚だよ。

マクス どうして？。

アナトール さういふ風に訊く譯には行かない！。

マクス ……？。

アナトール 僕はもう少し違つた訊き方をする必要がある。

マクス 然し此問ひは随分精到だと僕は思ふがね。

アナトール さうぢやない、缺點は正に其所にある、此問ひは充分精到だとは言へない。

マクス どうして？。

アナトール 僕が女に、お前は實を立ててゐるかと訊くとする、すると女は恐らくそれを最も廣い意味に解釋するだらう。



マクス それで？

アナトール 女は自分のあらゆる……過去をひつくるめて考へるかも知れない。……過去の、外の男を愛してゐた時分のことを考へて……さうして、いいえ、と返事をするかも知れない。

マクス それならそれで又非常に面白いぢやないか。

アナトール 難有う。……コーラが僕の前に外の男に逢つたことがある事は、僕承知してゐる。

……あの女は僕に言つた事がある、ほんとに、貴方の様な方に會へるといふことが前から分つてゐたら……さうしたら……

マクス ところが女にはそれが分からなかつたといふ譯なんだね。

アナトール さうだ……

マクス それで、君の問ひのことだがね……

アナトール うん。……此問ひは……此問ひは僕には愚鈍な様に思はれる、少くとも言ひ廻しの上では。

マクス ぢやかういふ風に訊いたら可いぢやないか、コーラ、お前は俺と會つて以來俺に實を立ててゐるか？

アナトール ふむ。……なるほどさう訊けばね。コーラの前で）コーラ！お前は……是も愚だ

よー。

マクス 愚だ!?

アナトール 君どうか……どういふ風にして僕等が知り合ひになつたか、考へて見て呉れ給へ。

僕等は、こんな夢中になつて了ふ様なことがあらうなどは、お互に夢にも思はなかつた。初めのうちはお互に二人の間をほんの一次的のこの様にしか考へてゐなかつたんだ。誰が知るものか……

マクス 誰が知るものか……？

アナトール 誰が知るものか、女が——外の男に飽きが來た時になつて、その時になつて初めて僕を愛し出したのぢやないといふことを。僕が女に會ふ前に、僕等が初めての言葉をとり交す前に、此女はどんなことを経験してゐたと思ふ？。そんな簡単に手を退くといふ譯にはいかなかつたのぢやないだらうか？。ことによると幾日も幾週も猶餘儀なく、餘儀なくと僕は言ふ、古い鎖を引摺つて歩行いてゐやしなかつただらうか？。

マクス ふむ。

アナトール 僕は尙その上にかういふことも言ひたい。……初めの内は、女の方もほんの出來心に過ぎなかつたんだ——是は僕もさうだつた。僕等はお互の關係を唯一時的の甘い幸福だとしてか



考へてゐなかつた、又それ以上のことを求めもしなかつた。さういふ時期に女が不實なことをしたからといつて、どうして僕がそれを咎める事が出来るか？。出来ない——全然出来ない。

マクス 君は變に寛大だね。

アナトール いや、決して寛大ぢやない、ただ瞬間的の境遇が持つてゐる利益をかういふ風に利用する事をノーブルでないと思ふに過ぎない。

マクス さうさ、そりやまつたく高尚な考へ方だ。然し僕はその當惑の中から君を救つてやらうと思ふ。

アナトール ——？。

マクス かういふ風に訊いて見たまへ、コイラ、お前は、俺を愛し出してから此方……お前は俺に實を立ててゐるか？。

アナトール さう言へば大さうはつきりはするね。

マクス ……で？。

アナトール 然しそいつはどうしてもいけない。

マクス へえ！。

アナトール 實を立てる！。全體、實を立てるといふ事は、どういふ事なんだ？。考へても見た

まへ……女が昨日汽車に乗つて何所かへ行つたとする、向ひ側の紳士が足で女の足の先に觸れたとする。今この特殊な、睡眠状態に依つて無限に昂じて行つてゐる識得力にとつては、或は又催眠中のメデイウムが必ず持つてゐる繊細になつた感受性にとつては、さういふ様なことでさへも不實なことだと考へないとは言へない。

マクス 然し君！。

アナトール その上あの女は餘計さう思ふに違ひない、何しろあの女は、この問題に關して僕等が度々繰返して來た會話で、人には多少誇張だと思はれさうな僕の考へ方を承知してゐるのだから。僕は女に云つたことがある。コイラ、お前が外の男をただ見ただけでも、お前はもう俺に不實をしたことになるのだぞ！。

マクス すると女は？。

アナトール すると女は、女は僕を笑つた、さうして、外の男を見るなんて、どうしてそんな事が考へられるのかと言つた。

マクス それなのに君は信じ——？。

アナトール 世の中には偶然といふことがある——考へても見たまへ、圖圖しい奴が夜あの女のあとをつけて女の襟脚にキッスをしないと限らない。



マクス でも——それは……

アナトール でも——それは決してあり得べからざることではない！

マクス ぢや君は訊く氣はないんだね。

アナトール さういふ譯ぢやない……然し……

マクス 君の言つたことは、結局すべてノンセンスだよ。實を立てて居るかどうかを女に訊いて見たまへ、大丈夫女は僕等の言ふことを誤解する氣遣ひはない。君が今此女に柔しい甘い聲で、お前は俺に實を立ててゐるか、と囁いて見たまへ……此女は決して紳士の爪先きのことも圖圖しい奴が襟脚にしたキッスのことも考へはしない——ただ僕等が普通不實と云ふ言葉で考へてゐること丈しか考へはしない。その上君は、返事に満足が出来なければ、どしどし問ひ續けて、何もかもはつきりさせることの出来る利益を持つてゐるぢやないか。——

アナトール ぢや君は遮二無二に僕に訊かせようと言ふのだな……

マクス 僕が？……訊きたいつて言つたのは君ぢやないか！

アナトール 實は僕たつた今思ひついた事がある。

マクス といふのは……？

アナトール 無意識といふこと！

マクス 無意識？

アナトール 僕は實際無意識の状態があるといふことを信じてゐる。

マクス さうかい。

アナトール かういふ状態は獨りでに生れるものである、が生れさせる、人工的に生れさせることの出来るものもある……心をぼんやりさせる様な酔つ拂らはせる様な手段で。

マクス 君、もつとはつきり説明してくれたまへ……

アナトール 仄暗い、しんみりした部屋を想像して見たまへ。

マクス 仄暗い……しんみりした……よろしい。

アナトール さういふ部屋の中に此女がある……それから誰か外の男がある。

マクス 然しどうして又女はそんな所に這入りこんだものだらうな？

アナトール そんなことには一先づ觸れずに置きたい。そりや口實は幾らもある……幾らでも！。かういふことはよりあることなんだから。それで——葡萄酒の洋盃が二つある……一種特別な重  
温い空氣が部屋に漲つてゐる、煙草の匂ひ、壁掛にふりかけた香水の匂ひ、淡いラムブの灯影、  
紅い帷——寂びて——ひつそりして——甘い囁きのみが聞こえる……

マクス ……！



アナトール 外の女でもさういふ場合には落ちて了つた！。此女よりももつと良い、もつと落つた女でも！。

マクス さうかも知れない、然し、外の男とさういふ部屋の中に這入つて行くといふことと、實を立てる立てないの問題とを、僕はどうしても結びつけて考へることが出来ないんだがね。

アナトール 世の中にはさういふ謎の様な事が幾らもあるよ……

マクス そこだよ、君。君は今眼の前に、多くの賢い人達が頭を痛めた謎の一つの、解釋を持つてゐる。たゞ訊きさへすりや可いんだ、君は君の知りたいと思つてゐる一切のことを知る事が出来る。たつたひとことだ——さうすれば君は、自分が唯自分だけ愛せられてゐるといふ様な少數者の一人であるか、それとも又、君の競争者は何所にあつて、その男が君に勝つたのはどういふ點にあるか、さういふことを知ることが出来る——然かも君は此言葉を口にしない！。……君は自由に運命に問をかけることが出来る！。然るに君はそれをしない！。毎日毎晩君は苦しんでゐる、君は本當の事を知るには君の生涯の半分は棄てても悔いしない様なことを言つてゐる、今本當の事は君の前に轉がつてゐる、然かも君は身を屈めてそれを取上げようとしなさい！。なぜだらう？。なぜでもない、君の愛してゐる女が實は、君の持論通りに凡ての女があると同じ様な女になつて了はしないと限られないからだ——さうして君は實は本當の事よりも夢の方を幾千倍

愛してゐるか分からないからだ。だからもう遊びは止めにして、此女を起こしたまへ、さうして君が奇蹟を——行はうと思へば行へたのだといふ得意な自覺で満足する事にしたまへ。

アナトール マクス！。

マクス え、僕が間違つてでもゐるのかい？。君は自分ちや氣がつかないのか、君が今まで僕に言つたことは、すべて遁げ口上で無意味なお座なりで、そんなことちや君は僕ばかりでなく君自身をも誤魔化すことは出来ない。

アナトール (慌てて) マクス……何とでも言ひたまへ、僕はやる、さうだ、僕は女に訊いてやる！。

マクス やるか！。

アナトール 然し氣を悪くしちや困るが——君の前ちや厭だ！。

マクス 僕の前ちや厭だ？。

アナトール 若し僕があのこと、あの恐ろしいことを聴かなければならぬとすると、いいえ、妾は貴方に實を立てちやゐないんです。と女が返事をするると——それを聴くものは、僕唯一人でなければならぬ。不幸であるといふことは——やつと半分の不幸にしかならない。が、憫れまれるといふことは——不幸を完全なものにする！。——僕はそれがいやなんだ。君は僕の



一番の親友であるには違ひない。然し恰も其事で僕は君の眼が、不幸な者に如何に彼が惨めであるかを初めて告げ知らせる、同情のあの表情をもつて僕の上に注がれることを好まない。もつとも外にまだ理由があるのかも知れない——僕には君の前に恥かしがる心があるのかも知れない。然しどのみち君には本當の事を話す積りである、若し此女が僕を欺してゐたのだとすれば、君が此女を此所で見ると今日が最後なんだ！。然し君が僕と一緒に其事を聞いてはいけない、それは僕にとつては耐へられないことなんだ。その氣持は君に分かつて貰へるだらう……？。

マクス ああ分るとも。(握手して)では君と女とを此所へ置いていく。

アナトール 君！。(彼を扉口まで送つて)一分経たないうちに呼ぶよ！。——(マクス去る)

アナトール (コーラの前に立つて……長いこと女を見詰める) コーラ……！。(頭を掉つて、行き歸りする) コーラ！。——(コーラの前に跪まづく) コーラ！。可愛いコーラ！。——コーラ！。(立ち上がる。決心して)お起き……起きてキスをおし。

コーラ (立上り、眼を擦り、アナトールの頸に抱きつく)アナトール！。妾よつほど寐てみたの？。……マクスはどうしたの？。

アナトール マクス！。

マクス (隣の部屋から来る) はいはい！。

アナトール さうさ……割に長く寐てゐたよ——それにお前は寐てゐて口を利いた。

コーラ あら！。でもなんにも悪い事は？。——

マクス 此人の訊く事に返事をした丈なのさ！。

コーラ 此人は一體何をきいたの？。

アナトール 色んなことを！。……

コーラ さうして妾はみんな返事をしたの？。みんな？。

アナトール みんな。

コーラ それで、貴方どんなことを訊いて、聞かせて呉れる譯には行かない？。——

アナトール あゝ、さういふ譯には行かない！。でも明日又かけてあげるよ。

コーラ あらいやだ！。もう決してかけさせない！。丸で魔法ぢやありませんか。眠つてゐて訊かれて、眼を覺ましてから丸でそんなことを知らないなんて。——妾屹度下らないことを饒舌つたんでせう。

アナトール あゝ……例へば、お前は俺を愛してゐるつて……

コーラ ほんと！。

マクス 嘘だと思つてゐるのだな！。ごりや随分面白い！。



コーラ でもねえ……其事なら妾起きてても貴方に言へてよ！

アナトール そりやありがたい！（抱擁）

マクス それぢやお二人さん……左様なら！——

アナトール もう行くのかい？

マクス 行かない譯にはいかない。

アナトール 送つて行かないが、氣を悪くして呉れたまふな。——

コーラ ぢやまた！

マクス どういたしましたして。（扉口で）。一つ分つたことがある、女といふものは催眠術にか

かつてゐても嘘をつくものだ。……然し二人は幸福だ——さうしてそれが一番大事なことだ。左様なら、お二人。（二人は絡まり合つて熱狂的に抱擁してゐたので、是が聞こえない）

## クリスマスMASの買物



人物

アナトール

ガブリエレ

クリスマスの夕方六時。ちら／＼雪が降つてゐる。維也納の往來。

アナトール 奥さん、奥さん……！。

ガブリエレ なんですか？……あら、貴方なの！。

アナトール えゝ！……私は貴女のあとをつけてたんですよ！。——貴女がそんな色んなものを抱へ込んでゐらつしやるのを、私凝と見てゐられないんです！。——その包みを私に持たせて下さい！。

ガブリエレ いえ、いえ、結構でございます！。——なに自分で持つて行きますわ！。

アナトール でも奥さん、お願いです、折角氣を利かせようと思ふんだから、そんな遠慮なんかしないで下さい——



ガブリエレ　それぢや——是を一つ……

アナトール　是つばかりぢやしやうがない……まあお寄越しなさい。……さう……それも……それからそれも……

ガブリエレ　結構ですわ、結構ですわ——御親切がすぎますわ！

アナトール　兎も角もさせて頂けさへすりや——するのが嬉しいのですよ！

ガブリエレ　でも貴方がからいふことをして下さるのは往來だけでせう、然も——雪の降つてゐる時だけでせう。

アナトール　……それから日暮方で——然も丁度クリスマスの時だけ——でせう？

ガブリエレ　でもまつたく不思議ね、貴方に又お目にかかれるなんて！

アナトール　え、え。……とおつしやるのは、私が今年になつて一度もお宅へ伺はないといふことなんでせう——

ガブリエレ　え、まあさういつた様なことなの！

アナトール　奥さん——私は今年はどこらへも伺はないんです——どちらへも！。それで——御主人はお變りはありませんか？。お小さいのは何をしてゐらつしやいます？。——

ガブリエレ　そんなこと御自分に訊いて御覽になるとよろしいわ！。——そんなことには丸で興

味は持つてゐらつしやりもしない癖に！

アナトール　かういふ眼の利く人に會つちや、かなはない！

ガブリエレ　貴方は——わたくし知つてゐます！

アナトール　ところが私が希望してゐる程よくは知つてゐて下さらない！

ガブリエレ　その註釋は止して下さい！。いい——？

アナトール　奥さん——そりや無理ですよ！

ガブリエレ　包みを返して下さい！

アナトール　憤つちやいけません——憤つちやいけません!!。——もう私も大人しくしてゐます。

(二人は黙つたまま並んで歩行いて行く)

ガブリエレ　何か話をなすつても可いわ！

アナトール　何か——え、で——も貴方の検閲があんまり厳しいから……

ガブリエレ　可いから何か話してお聞かせなさい。もう随分長いことお目に掛らなかつたんぢや

ありませんか。……一體あなたは何をなすつていらつしやるの？。——

アナトール　いつもの通りなんにもしてゐないのです！

ガブリエレ　なんにも？



アナトール 丸つきりなんにも！。  
 ガブリエレ まつたくお氣の毒ね！。  
 アナトール だつて……そんな事はあなたには丸で餘所ごとぢやありませんか！。  
 ガブリエレ どうしてまた貴方はさういふことが言ひ張れます？。——  
 アナトール どうして私は自分の一生を棒に振つたんでせう？。——誰のお蔭でせう？。——誰の！？。

ガブリエレ 包みを下さい！。——

アナトール 私は誰のお蔭だとも言やしないぢやありませんか。……私はただ漫然訊いて見た丈なんです。……

ガブリエレ 貴方は始終散歩してらつしやるんでせうね？。

アナトール 散歩！。あなたは散歩といふ言葉をそんな嘲弄するやうな調子でおつしやるんですね！。世の中には外にもつと結構な事があると云ひでもする様に！。——散歩といふ言葉の中には目的のない快さといふ様な心持があります！。——今日はもつとも私は散歩してゐるのぢやない——今日は私、用足しに来たんですぜ、奥さん——丁度あなたの通りに！。——  
 ガブリエレ どうして！？。

アナトール 今日私もクリスマスの買物をするんです！。——

ガブリエレ 貴方が！？。

アナトール ただ旨い思ひつきが出て来ない！。——お蔭でもう大分前から毎晩毎晩あらゆる町のあらゆる店先に立ちづめなんです！。——商人といふものは丸で趣味がない、その上發明の才のないものですね。

ガブリエレ それは買手の方でこそ持つべきものですわ！。貴方みたいに別に用といつて持つてゐない方が、自分で工夫して、自分で發明すべきものです——さうして贈物を秋時分から誂へて置くものですよ。——

アナトール どうして、私はさういふことの出来る人間ぢやありません！。——第一クリスマスになつたら誰に何を贈らうなんて、秋から分つてゐるものですか。——ところで、今はもう樹を立てるまでに二時間しかない——然も私は未だに當りさへつかないんです、當りさへ！。——

ガブリエレ 手傳つて上げませうか？。

アナトール 奥さん……あなたは天使です——でも包みを返せなんて言つちやいけませんぜ……

ガブリエレ えゝゝえゝ……

アナトール ぢや天使だ！と申し上げたい。——ほんとに有難い——天使だ！。——



ガブリエレ 貴方黙つて下さる譯には行かない？

アナトール いえ、もう大人しくします！

ガブリエレ それで——何か手懸りがなくつちや。……貴方の贈物といふのはどんな人の所へ行くの？

アナトール ……それは……實は一寸言ひにくいんです……

ガブリエレ 無論女の方でせう！

アナトール え、さうです——あなたが眼が利いてゐるといふことは、もう先刻一度申し上げました！

ガブリエレ ですがどういふ……女の方なの！——本當のダーメなの！

アナトール ……私達は此際言葉の内容の上で一致して置く必要があります！。若しあなたが社交界のダーメといふ意味でダーメといふ言葉を使つてお出でなでしたら——さうしたら丸で違ひます。

ガブリエレ ぢや……小さい世界の方の？……

アナトール よござんす——小さい世界と言ひませう。——

ガブリエレ そりや妾まつたく想像もつかなかつた……！

アナトール 皮肉だけはよして下さい！

ガブリエレ 貴方の趣味は知つてゐます。……屹度どつかに際立つて可い所があるに違ひない——細そりしてゐて金髪で！

アナトール 金髪——は當つてゐます……！

ガブリエレ ……さう、さう……金髪で……でも、貴方がそんな場末のダーメなんかを始終相手に——始終相手にしてゐらつしやるといふのは不思議ね！

アナトール 奥さん——そりや私の罪ぢやありません。

ガブリエレ 貴方——そんなこと止して下さい！——でも、貴方はやつぱり貴方の性に合つた所にゐらつしやるのが可いわ……始終勝鬨の擧げてゐられる場所を退く方が、どの位よくない事だかわからない……

アナトール 然し外に私はどうしませう——あすこだけでしか私は愛されないんです……

ガブリエレ ぢや貴方は理解されますか……あすこでは？——

アナトール 理解どころですか！——然し、考へて下さい……あの小さな世界だけでしか私は愛されない、大きな世界では——理解される丈です——あなたは御存知の癖に……

ガブリエレ 私は些とも存じません……又その先を存じたいとも思ひません！——ゐらつしや



い……此所に丁度都合の可い店がある……貴方の可愛いのに何か買ってやりませうよ。……  
アナトール 奥さん！——

ガブリエレ まあ、これ……一寸御覧なさい……あれ……あんな可愛い匣に香水が三通りも這入  
つて……それともこの、シャボンの六つ這入つてゐる箱は……パチユリと……シールと競馬印  
と……でも是は一寸可いぢやありませんか——いけない！？

アナトール 奥さん——そりやあんまりひどい！

ガブリエレ それとも、待つてらつしやい、此所に……一寸御覧なさいよ。……この小さな  
襟針は人造ダイヤが六つもついてゐて——ね——六つよ！。なんてまあきらきら光るんでせう！。  
——それともこの綺麗な可愛い腕環は、あんな見事な飾のある。……片一方の方には丸で生きて  
ゐる様な黒奴の首がつけてある！。——是だと屹度随分幅が利くわよ……場末では……

アナトール 奥さん——貴女は誤解してゐらつしやる！。あなたはかういふ種類の女を知らない  
んです——貴女が想像してゐらつしやる様なのは丸で違ひます……

ガブリエレ それからあすこに……あら、綺麗なこと！。——もつと傍へ来て見て御覧なさい——  
——ほら——あの帽子はどう！？。あの形は二年前大そう流行つたのよ！。それにあの羽根が——ゆ  
らゆら波を打つて——いけない！？。屹度素晴らしい騒ぎになつてよ——ヘルナルスでは！？。

アナトール 奥さん……ヘルナルスのことを言つてゐるんぢやありませんよ……それに貴女は、  
ルナルス趣味をどうやら見縊つてゐらつしやる……

ガブリエレ あら……まつたく貴方は人困らせね——ぢや、手を貸して下さいな——手懸りにな  
る様な事を聞かせて下さいな——

アナトール どうすれば私にそれが……！？。あなたは屹度私を見縊つてにやにやなざるに違ひな  
い——どのみち！。

ガブリエレ あら、そんな事が！。——可いから教へて下さい……！。その人は見榮坊なの——  
それとも慎深い？。——大きい、小さいの？。——けばけばしい色氣のものが好き……？。

アナトール あなたの御親切をそのまま受けちや悪い様な氣がする！。——あなたは嘲弄なざる  
に過ぎないんだから！。

ガブリエレ あら、そんなこと、私おとなしく聞いてるわ！。——その人のことを何か話して下  
さいな！。

アナトール 勇氣がありません——  
ガブリエレ 勇氣を出して御覧なさい！。……いつから……？。

アナトール それは止ませう！。



ガブリエレ 私是非聴くわ！。いつからその人と知り合ひになつたの？。

アナトール もう——大分前の事です！。

ガブリエレ そんな風にして——訊かせるのは止して頂戴……！。兎に角歴史をすつかり話してお了ひなさい……！。

アナトール まつたく歴史なんかにやなりません！。

ガブリエレ でも、何所で知り合ひになつたとか、それからいつどういふ風にして知り合ひになつたとか、それからその人といふのはどういふ風な人だとか——さういふことが私承りたいんです！。

アナトール よござんす——然し退屈しますよ——前以て申し上げて置きますが！。

ガブリエレ 直ぐ面白くなつて来るわ。本當に私、一度さういふ世界のことを少しでも聴いて置きたいと思つてたの！。——一體それはどういふ世界？。——私丸で何んにも知らないのよ！。

アナトール その上あなたは屹度理解することも出来ずまい！。

ガブリエレ さやうでございませうか！。

アナトール あなたには自分の圈内に這入らないものはどんなものでも一括りにして輕蔑する癖がある！。——甚だよくないことだ。

ガブリエレ でも、私はこんなに教はりたがつてゐるぢやありませんか！。さういふ世界のことには誰も私に話して聞かせないんですもの！。——どうして知りようがありません？。

アナトール 然し……あなたは——其所では人が貴女から何物かを奪つて行くのだといふ様な、さういふ漠然とした感じを持つてゐらつしやる。ひそかな敵意を！。

ガブリエレ お言葉でございませうが——私が持つてゐようとさへ思へば——誰もなんにも奪りや致しません。

アナトール え……然し、御自分では欲しいとお思ひにならないでも……それを外の者が手に入れると、さうは言つてもあなたは不愉快な氣がするでせう？。——

ガブリエレ あら——！。

アナトール 奥さん……それこそ純粋な女らしさなんです！。それは純粋な女らしさなんだから——それは又言はば最も貴い最も美しい最も深いものなんです……！。

ガブリエレ 一體貴方は何所でそんな皮肉を覺えてゐらつしやつたの!!。

アナトール 私は何所でそれを覺えて來たのでせう？。——私はあなたに申し上げます。私も昔は好い人間だつたんです——人を信じ切つて——私の言葉には少しも刺がなかつた……。さうして私は澤山の手傷をじつと我慢してゐました——



ガブリエレ ロマンティックになるのだけはおよしなさい！。

アナトール 素直な手傷は——さうです！。——最も愛する唇から出たとしても、順當な時の「否」といふ言葉は——私も紛ざらすことが出来ました。——然し、眼は百度も「仕誼によつたら！」と言ふのに——唇は百度も「可いわ」と微笑してゐるのに——聲の調子は百度も「屹度」といふ様な響を持つてゐるのに、「否」といふ——さういふ「否」は人を——

ガブリエレ 私達は買物をする筈だつたんでせう！。

アナトール さういふ「否」は人を馬鹿にします……それでなければ人を皮肉屋にします！。

ガブリエレ ……貴方はお話をなさる……筈だつたんでせう——

アナトール よござんす——遮二無二しろとおつしやるのなら……

ガブリエレ 是非していただきたいの！……どういふ風にして貴方はその人と知り合ひになつたの……？。

アナトール おやおや——どうして人が丁度ある人と知り合ひになる！。往來で——舞踏で——乗合で——洋傘の下で——

ガブリエレ でも——貴方には分かつてゐる癖に——特別な場合が私には興味があるんです。私達はその「特別な場合」のために何か買はうぢやありませんか！

アナトール あすこのあの……「小さな世界」では決して特別な場合なんかありません——大きな世界だつても實際はそんなものはない。……あなたがたはみんなまつたく型に拵つてゐるんですもの！。

ガブリエレ 貴方！。話をなさいな——

アナトール 何も嘲弄の意味で言つてゐるのぢやありません——決してそんなことない！。——私だつても型の一人なんだから！。

ガブリエレ ぢやどんな型？。

アナトール 腹の据らない鬱ぎ性！。

ガブリエレ ……それぢや……それぢや私は？。

アナトール あなた？——なんでもない、通り者！。

ガブリエレ さう……！。それぢやあの女は！？。

アナトール あの女……？。あの女は……可愛い遊女！。

ガブリエレ 可愛い！。「可愛い」といふ字までつくの？。——それに私は——「通り者」きりで——

アナトール 是非つけろと仰やるのなら——意地悪の通り者……



ガブリエレ で……もうその……可愛い遊女遊女の話をして可いんでせう！。

アナートル その女は人目を牽く程美しい女ぢやない——取立てて粹いとだといふのでもない——また決して才気があるといふのでもない……

ガブリエレ 私はその人の「ない」ことを聞かせて下さいと言やしません——

アナートル 然しその女は春の宵の様な柔らかな優婉なところを持つてゐます……それから魔法にかかつた王女の様なたをやかなところを持つてゐます……それから戀することを知つてゐる乙女の精神を持つてゐます！。

ト ガブリエレ さういふ種類の精神は屹度非常に廣まつてゐるのでせうね……貴方のその小さな世界では……

アナートル さういふ風な解釋をするもんぢやありません！……あなたが若い娘の時分には、側側のものがあなたになんにも話して聞かせな過ぎた——ところが、あなたが若い奥様になつてからは、側側のものがあなたにあんまり話して聞かせ過ぎた！。だからあなたは素直な觀察が出来なくなつてゐるんです——

ガブリエレ だからさう言つてゐるぢやありませんか——教へて頂きたいつて……私もうちやんとその「魔法にかかつた王女」のことを聴きますわ！。——鬼に角、その人の住んでゐる魔法の

園がどんな風だか、話して聞かして頂戴——

アナートル 決して豪奢な名聞ヤコンを想像なすつちやいけません、重い帷たばがだらりと垂れてゐて——隅にはマカルト風の花束があつて、小さな置物だのや派な氣ランプだのがあつて、淡い色の天鵝毛が張つてあつて、……暮れて行く午後午後の光の様な薄暗がり薄暗がりが態態たてたてつくり上げてある様な……

ガブリエレ 私は想像しては「いけない」ものを伺ひたいとは申しませんよ……

アナートル ぢや——かういふ所を考へて下さい——小さなごくごく小さな——仄暗い部屋で——壁は塗つた壁で——然かも少し明る過ぎる位な色で——ところどころに二三枚の古い拙い、標題の字の消えてゐる、銅板畫がかかつてゐる。——笠のかかつた吊洋燈がある。夜になると窓越しに闇に沈んで行く屋根や煙突が見渡せる！。……それから——春になると、向う側の庭には花が咲いて花の匂が立つ……

ガブリエレ 貴方は幸福な方ね、クリスマスの時分にもう五月のことを考へてゐらつしやるんだから！。

アナートル え——あすこでは、私も時時幸福だと思ふことがあります！。

ガブリエレ もう澤山、澤山！。——随分遅くなつた……その人に何か買つてやる筈だつたんでせう！。……何かその塗壁の部屋の飾りになる様なものかなんかでも……



アナトール 別に不足なものはありません！。

ガブリエレ さうね……その人にはね！——そりやさうでせう！——でも私は貴方の爲に——え、貴方のために！ その部屋を貴方の趣味に合はせてちやんと飾つて上げたいのよ！。

アナトール 私のために？。——

ガブリエレ 波斯の絨氈で……

アナトール 奥さん願ひです——よして下さい！。

ガブリエレ 切子細工の色硝子の吊洋燈で……？。

アナトール ふむ！。

ガブリエレ 二つ三つの麩に切り立ての花を挿して？。——

アナトール え……然し私はあの女に、何か買つて行つてやりたいんです——

ガブリエレ さうさう……まつたくね——なんとかきめなくつちや——屹度待つてゐるんでせうね？。

アナトール え……！。

ガブリエレ 待つてゐるの？。——お聞かせなさいよ！……その人はどういふ風にしてお待ち受けしてゐるの？。——

アナトール どうつて——みんなと違ひはありません。——

ガブリエレ もう階子段のところを貴方の足音を聞きつける……のでせう？。

アナトール え……！……偶には……

ガブリエレ それで、扉口に立つてゐるの？。

アナトール え……！。

ガブリエレ さうして貴方の頭に噛りついて——さうしてキスをして——さうして……一體その

人はどんな事を言ふの……？。

アナトール さういふ際に、誰も言ふ通りなことです……

ガブリエレ それで……例へば！。

アナトール 例なんか知りません！。

ガブリエレ 昨日はなんて言つたの？。

アナトール え……！——別に變つたことも……それに聲の調子を一緒に聞くのでなけりや、如何にも下らなく響きます……

ガブリエレ 調子は私の方で附けて考へるわ。それで——なんて言つたの？。

アナトール ……「こんな嬉しい事はないわ、またお目にかかれて！」



ガブリエレ 「こんな嬉しい事はないわ」それから!?

アナートル 「またお目にかかれて!」……

ガブリエレ ……まつたくいいのね——ほんとにいいわ!

アナートル え……情があつて實があるのです!

ガブリエレ そしてその人は……何日も獨りでゐるの!。邪魔がなくて逢つてゐられるのね!?

アナートル そりやさうです——自分一人氣儘に暮してゐるのです——丸で一人ぼつちなんです

——父親も、母親も……小母さんさへ居ないんです!

ガブリエレ すると貴方が……その人の凡てなのね……?

アナートル ……さうかも知れません!。……今日……(沈黙)

ガブリエレ ……随分遅くなつたわ——御覽なさい、もうこんなに人通りがなくなつて……

アナートル あ——あなたをお引き止めしました!。お宅へゐらつしやらなけりやならないんですね。——

ガブリエレ え……さう——え……さう!。屹度待つてるわ!。——あれは、贈物のことはどうしたら可いでせうね……?

アナートル なに——自分で是から何か些としたものを見つけます……!

ガブリエレ 目つかるでせうか、あやしいわね!。——それに私も一旦思ひ立つたことなのだから、私が貴方の……私がその……遊女のかたに——何か目つけて上げようつて……!

アナートル いえ、奥さん、御心配には及びません!

ガブリエレ ……出来れば、貴方がその人の所へ贈物を持って行く所を見たいんだけれど……私その小さな部屋とその可愛い遊女のかたが見たくつてしやうがないの!。——自分がどんなに仕合せなんだか、當人は丸で知らないんでせう!

アナートル ……!

ガブリエレ でも、ね、その包を下さいな!。——随分遅くなつた……

アナートル え……え……!。包みは此所にあります——然し……

ガブリエレ お願ひだから——あの此方へ来る馬車をよんで下さい……

アナートル 急にそんなに急ぎ出して!?

ガブリエレ お願ひよ、お願ひよ!。(彼が合圖をする)

アナートル 難有う……!。でも、贈物のことはどうしませうね……?

(馬車が止まる、二人は立止まる、彼が馬車の扉を明けようとする。)



ガブリエレ 待つて頂戴！——：私がその人に上げたい物があるのよ！。

アナートル あなたが：：！？。奥さん、あなたが御自身で：：

ガブリエレ 構はないぢやありませんか！？。——これ：：貴方：：この花を持って行つて下さいな：：この花は、まつたくつまらないものです：：！。ただほんの御愛想の印<sup>しるし</sup>まで、それつきりのものなの。：：然し：：貴方の方では何か添へて遣つて頂戴——

アナートル 奥さん——どうも御親切に——

ガブリエレ 是をその人に渡して、私が貴方にお言傳する言葉も一緒に向うに傳へると、約束して下さい。

アナートル え。

ガブリエレ 約束して下さいさる？。——

アナートル え：：喜んで！。厭だなんて言ふもんですか！。

ガブリエレ (馬車の扉を明ける) ぢや、かう言つて下さい……

アナートル なんて：：？。

ガブリエレ かう言つて下さい。「私の：：可愛い遊女<sup>まじな</sup>よ、ある女がこの花をお前に上げる。その女はすれば乾度お前と同じ様に戀をすることが出来る、然しその女はただその勇氣を持つてゐ

なかつた……」

アナートル 奥——さん！？。

(彼女は馬車に乗つた——馬車はがらがらと行つて了ふ、往來は人通りが丸でなくなつた。

彼は馬車が角を曲がるまで長いこと見送つてゐる。：：彼はなほ暫くつつ立つてゐる。それから時計を見て、慌しく去る。)



插  
話

THE UNIVERSITY OF CHICAGO  
LIBRARY



人物

アナトール

マクス

ピアンカ

挿

話

マクスの部屋、全體が暗くしてある、黒紅い壁掛、黒紅い帷とばり。奥の眞ん中に扉と。見物から言つて左手に第二の扉。部屋の眞ん中に大きな書卓、笠をかけた洋燈がその上に置いてある、書籍雑誌の類が散らかつてゐる。前の方の右手に高い窓。右の隅に煖爐があつて火が燃えてゐる。煖爐の前に二つの低い凭掛椅子。煖爐隠しの衝立が無雑作に側に押し遣られてある。

マクス (書卓にかかつて、葉巻を燻らしながら、手紙を讀んでゐる) 「愛するマクス!。私はまた來ました。もう新聞で御存知だとは思ひますが、私達の一座は三月ほど此所にある筈です。初めての晩はお友達に捧げなければならぬ。今夜私は貴方の所へ参ります。ビビ……」。ビビ……ピアンカだな……ぢや、待つてゐよう。(扉を叩く音がする) もう來たのかな……?。お這

63



入り！。

アナトール (大きな包みを抱いて、陰気な顔をして這入つて来る) 今晚は……

マクス おや——何を持つて来たんだ？

アナトール 僕は僕の過去のために匿れ家を探してゐる。

マクス といふと？。

アナトール (包みを差し出す)

マクス これは？。

アナトール 此所に僕の過去を、僕の若かつた生活の全部を持つて来た、君の所に預つて置いて呉れたまへ。

マクス 喜んで。然し君、もつと詳しく説明して呉れないか？。

アナトール 僕、かけても可いかい？。

マクス 可いとも。然しどうしてまた君はそんなに物物しくするんだい？。

アナトール (かける) 葉巻を吸つても可いかい？。

マクス さあ！。取りたまへ、今年葉だ。

アナトール (出された葉巻に火をつける) あ——うまい！。

マクス (アナトールが書卓の上に置いた包みを指しながら) これを……？。

アナトール この青春生活は僕の家にはもう泊めて置く譯に行かない！。僕は此市を去る。

マクス へえ！。

アナトール 何日からときまつてもゐないが、僕は新らしい生活を始める。そのためには僕は自由で一人でなければならぬ、だから僕は僕の過去から離れる。

マクス ちや新らしいのが出来たんだな。

アナトール いや——ただ、今のところ古いのがないといふこと丈なんだ……(急に口を緘んで、包みを指しながら)——ね君、此がらくた一切を君の所に置いといてくれたまへ。

マクス がらくた、だつて——！。君はなぜ燃して了はない？。

アナトール 僕にや出来ない。

マクス 馬鹿だね。

アナトール いやさうぢやない。それが僕の實なんだ。僕は自分の愛した女は、一人でも忘れることが出来ない。この紙片や花や髪の毛を掻き廻してゐると——君、偶に僕が掻き廻しに来ることは許して呉れたまへ——僕はみんなと一緒居る様な心持になる、その時みんなは更に蘇へつて、さうして僕はまた更にみんなを崇拜する。



マクス　ぢや僕の家うちで昔の戀人たちと逢引しようといふんだね……？  
 アナトール　（相手の言葉を耳に入れず）僕は屢たびさう思ふことがある……誰れも彼れもみんな僕の目の前に現はれて来る様な、何かお呪まじなひになる言葉があれば可い！。なんにもない所からみんなを呼び出して来る様な、術でもあれば可い！。

マクス　なんにもない所と言つたつて、それにも色々あるだらう。

アナトール　そりやさうさ……まあ想像して見たまへ、僕がそれを、そのお呪を唱へる所を……

マクス　效目のある言葉が目つかりさうなものだな……例へば、無二のわが戀人よ！。

アナトール　ぢやさう言はう。無二のわが戀人よ……！。するとみんながやつて来る、一人は郊フョル

外のちひさな家から、一人は自分の所ところ天の綺羅びやかな客間から——一人は劇場の化粧部屋から

ル——

マクス　もつと！。

アナトール　もつと——よろしい。……一人は小間物屋の店から——

マクス　一人は新らしい戀人の腕から——

アナトール　一人は墓の中から。……一人はここから——一人はかしこから——さうしてみんな

が揃ふ……

マクス　そのお呪ひは唱へない方が可ささうだ。さういふ集りは不愉快なものになるにきまつてゐる。なにしろみんな君を愛しなくなつてゐるに違ひないから——然も焼餅やきでないものはないから。

アナトール　まつたくだ……それぢや平和に眠つておいでなさいだ。

マクス　それぢやともかくこの大した包みのために、場所を作る必要があるね。

アナトール　是を分けといて呉れたまへ。（包みを引き破ぶる。中から綺麗な、リボンで結へた

小さな包みが幾つも出て来る。）

マクス　おやおや！。

アナトール　みんなちやんと揃へてある。

マクス　名前順で？。

アナトール　そんなこと。包みの一つ一つには何か銘がうつてある。詩か、言葉か、覚え書か、

僕の経験をすつかり思ひ出す事の出来る様な事が書いてある。名前は一つも書いてない——マリ

エとかアンナとか要するに多勢あるんだからな。

マクス　讀ませ給へ。

アナトール　みんな覚えてゐるか知ら？。中には二度と見もせず、何年も放つて置いたものも



ある。

マクス (小さな包みを一つとり上げて、讀む。)

『心をそそる美はしき、懐かしき、荒きものよ、

我はいざおんみをかき抱かなむ、

我はおんみの頸に接吻す、マテイルデよ、

おん身不可思議のうまし女!』

ナ ……でも是は名前があるぢやないか——?。マテイルデつて!

ト アナトール さうだ、マテイルデ、——然し本當の名前は違つてゐた。僕は何時でもその女の頸

一 筋にキスしてゐた。

ル マクス その女はなんていふんだい?。

アナトール それは訊かないで呉れたまへ、その女は僕の腕の中で寝た、それだけで澤山だ。

マクス ぢやマテイルデは是でおしまひとして。——然し大そう長つ細い包みだな。

アナトール さうさ、髪の毛が這入つてゐる計だもの。

マクス 手紙もないのか?。

アナトール 冗談——あの女から手紙なんて!。あの女には手紙一本が大變な仕事なんだから。

それに君、女が一紙手紙を寄越して見たまへ、僕等はどうすりや可いんだ!。とにかく、マテイルデはもうよしにしよう。

マクス (前の様に) ……「一つの點に於ては凡ての女は悉く同じものである。人彼等の嘘を押へるとき、彼等は鼻持ちもならないものとなる」。

アナトール さうだ、まつたくだよ!

マクス こりや誰だい?。重い包みだね!

アナトール 八頁一杯の嘘のかたまりだ!。それも止さう。

マクス ぢやこの女も鼻持ちがなくなつたんだね?。

アナトール 僕がその女の嘘を押へてからは、その女は止しにしよう。

マクス 鼻持ちのならない嘘つきは止しにするか。

アナトール 侮辱しちやいけない。その女は僕の腕の中で寝たんだ、——その女は神聖だよ。

マクス そりやまあひと理窟だね。それぢや次。(前の様に)

「いやな氣持を煽り消すため、

愛するものよ、私はお前のお婿さんのことを考へる。

すると、わがうまし賣よ、すると私は微笑しずにはゐられない。



あんまり滑稽なことが世の中にはあるんだから」

アナトール (微笑しながら) さうだ、さうだ、あの女だ。

マクス おやおや、——一體中に何が這入つてゐる？

アナトール 寫眞さ。お婿さんと一緒にとつた……

マクス 君はそのお婿さん知つてゐるのかい？

アナトール 無論さ、知らなけりやおかしくもなれない筈ぢやないか。あいつは馬鹿だつた。

マクス (眞面目に) その男は女の腕の中に寝たんだよ、その男は神聖だよ。

アナトール 澤山。

マクス 滑稽なお婿さんごと、この陽氣な可愛い子も止しにするか。(新らしい包みを取り上

げて) こりやなんだ？。たつたひとこと？。

アナトール なんだつて？。

マクス 「ひつ叩かれ」。

アナトール あ、覚えてゐる。

マクス お仕舞が是なんだね？。

アナトール ううん、何よりだ。

マクス へえ、さうか！。それから。……「焔を燃しつけるよりも、焔の向きを變へる方がよつほど容易しい」。——こりやどう言ふことなんだ？。

アナトール さうさ、僕が焔の向きを變へたんだ。燃しつけたのは外の男だつた。

マクス 焔は是で止しにするか。……「女は何日でも烙鏝を持つてゐる」。不審さうにアナトールを見る。

挿

アナトール さうさ、その女はまつたくいつでも烙鏝を持つてゐる——どんな場合にも、然しその女は馬鹿に綺麗だつた。それに、僕はその女の面紗の切れ端きり持つてゐない。

マクス さう、そんな觸りがするね。……(讀み續ける)「どうして私はお前を失つたんだらう？」……それで、君はどうしてその女を失つた？。

話

アナトール それが分からないのだよ。その女は消え失せた——不意に僕の生活から消え失せたんだ。然し君、さういふことはよくあることなんだよ。丁度何所かに洋傘を忘れて来て、幾日も立つてからやつと氣がつくやうなものだ。……その時は、何日の事だつたか何所だつたか、覚えちやゐない。

マクス さらば、失はれたる女。(前の様に)

「懐しくもまたいとほしものなりき」——



アナトール (夢見る様にして先を続ける)

「指のあれたるわが乙女」

マクス こりやコーラだな——さうぢやないか？

アナトール さうだ——君はあの女を知つてゐたね。

マクス あの女はどうした？

アナトール その後あの女に會つたことがある——指物師の神さんか何かになつてゐた。

マクス へえ！

アナトール さうだ、指のあれた女もお仕舞はかういふ風になる。市で可愛がられて、郊外

では結婚させられる……がほんとにいい子だつた！

マクス おさらばだ——！。是はなんだ？……「挿話」——なんにも這入つてゐないぢやない

か？……芥だ！

アナトール (封筒を手にとつて) 芥だ——？。もとは花だつたんだが！

マクス どういふことなんだい、挿話といふのは？

アナトール いや別に、一寸さう思つたからさ。ほんの挿話、二時間のロマンスに過ぎなかつた

といふ迄さ！……まつたく芥だね！——あんなに嬉しかつた事が、あとにこんなものしか残

さえないといふのは、まつたく悲しいことだ。——さうぢやないか？

マクス さうだ、まつたく悲しいことだ……。然しどうして又君はかういふ言葉を思ひついた

んだね？。是は書けば何所にだつて書ける言葉ぢやないか？

アナトール そりやさうだ。然しその時程僕はさういふ氣がしたことはない。僕が女の誰れ彼れ

と一緒にゐる時、殊に僕が自分を非常に偉いもの様に思つてゐた昔は、よく僕の唇の上に、氣

の毒だなあ——氣の毒だなあ——！といふ言葉が出て來たものだ。

マクス どうして？

アナトール どうしてつて、僕は自分を偉大な人間の一人だと思ひ込んでゐたんだ。娘だの妻君

だの——さういふものを僕は、地球の上を踏みしだいて廻る、この鐵の脚で踏み潰して了つた。

世界の理法なんぞ——超越して了ふべきだ、と僕は考へた。

マクス 君は樹樹の花を吹きちぎる暴風だつたんだ……ね？

アナトール さうだ！。その暴風の様に僕は吹き荒れた。それだからこそ、氣の毒だなあ、氣の

毒だなあ、と考へたんだ。ところが實はそれは僕の夢に過ぎなかつた。今ぢや僕には自分がそん

な偉い人の仲間ではないといふ事が分つてゐる、然も特に悲しい事は——僕がそれで納まつてゐ

るといふことなんだ。然しての時分は！

話

挿

アナトール どうしてつて、僕は自分を偉大な人間の一人だと思ひ込んでゐたんだ。娘だの妻君

だの——さういふものを僕は、地球の上を踏みしだいて廻る、この鐵の脚で踏み潰して了つた。

世界の理法なんぞ——超越して了ふべきだ、と僕は考へた。

マクス 君は樹樹の花を吹きちぎる暴風だつたんだ……ね？

アナトール さうだ！。その暴風の様に僕は吹き荒れた。それだからこそ、氣の毒だなあ、氣の

毒だなあ、と考へたんだ。ところが實はそれは僕の夢に過ぎなかつた。今ぢや僕には自分がそん

な偉い人の仲間ではないといふ事が分つてゐる、然も特に悲しい事は——僕がそれで納まつてゐ

るといふことなんだ。然しての時分は！



マクス それで、その挿話は？

アナトール さうさ、それがやつぱり又さういふ……さういふ、僕の道を過つた、女の一人だつた。

マクス さうして君の踏み潰した……

アナトール 君、よく考へて見ると、どうもやつぱりそんな気がするよ、僕はまったくその女を踏み潰したのだ。

マクス へえ！

アナトール さうだよ、まあ聞きたまへ。是は實際、僕が経験した事の中で、一番嬉しかったことなんだ。……然し話さうと思つてもなかなか話せない。

マクス どうして！

アナトール どうしてつて、事件は考へられ得る限り平凡な事件なんだから。……まるで……なんでもない事なんだから。君には到底その中から美しいものを感じ分ける譯には行かない。この事件一切の秘奥は、僕がそれを経験したといふ點にある。

マクス それで——？

アナトール それで、僕はピアノに向いて掛けてゐる。……それは僕がその時分住まつてゐた小

さい部屋でのことなんだ。……夜。……僕はその女を二時間このかた知つてゐる。……僕の色硝子の吊洋燈が燃えてゐる——僕は色硝子の吊洋燈のことを話して置く、それも此場合入用なのだから。

マクス それで？

アナトール それで！。それで、僕はピアノの前に掛けてゐる。女は——僕の脚元にゐる、そのため僕は踏板を踏むことが出来ない。女の頭は僕の腰にある、女の亂れた髪は洋燈の光で紅く又緑に燃えてゐる。僕はピアノで出鱈目を弾く、左の手だけで、僕の右の手を女は自分の唇に押しつけてゐる……

マクス それで？

アナトール 君は始終先きが聞きたさうに「それで」と言ふ。……それぎり先はないんだよ。……とにかく僕は二時間このかた女を知つてゐる、今夜ぎりでもう二度と會ふことはあるまいといふ事も僕には分つてゐる——それは女が僕に言つたことなんだ——然もその時僕は女から懸命に愛せられてゐるのだといふ事を感じてゐたんだ。その事が僕をすっかり包み込んで了つた——全體の空気はこの愛に浸されこの愛の匂ひを立ててゐる。……君分るかい。(マクス點頭く)——その時僕は又してもあの愚かな然し神神しい、氣の毒だなあ——氣の毒だなあ！を考へたのだ。こ



の事件の挿話的ところがそれほどまざまざと僕の心に浮かんだのだ。女の口の暖かい息を自分の手に感じながら、僕はもう凡ての事を思ひ出の中で経験してゐたんだ。もうすっかり過ぎ去つて了つた事である。この女も亦、自分がその上を飛び越して行く筈の、一人であつた。そこであの言葉が、潤ひのない「挿話」といふ言葉が、自然と僕の頭に浮かんで來た。然しその際は、僕自身は何かかう一種の永久的なものだつたのだ。……この「氣の毒な女」にとつてこの時のことは忘れようと思つても決して忘れることは出来ないのだといふことが、僕に分かつてゐた。僕はそれを丁度その時に知つてゐた。明日の朝は俺は忘れられるのだ……といふ氣のすること、も度度ないでもない。然し是はそれとは少し譯が違ふ。その、その時僕の脚元に横になつてゐた女にとつては、僕は全世界を意味してゐたのだ。僕はこの瞬間女がいかに神聖な不滅な愛情で僕を包んでゐるかといふ事を、ちやんと感じたのだ、さういふことは實際感じるものなのだ、誰がなんと言つても僕は僕の感じは動かされない。まつたくこの瞬間女は僕以外のことは——僕のことと丈しか、考へられなかつた。しかし僕にとつて女は、既に嘗てあつたもの、一時的なもの、「挿話」であるに過ぎなかつたのだ。

マクス 一體その女といふのは何なんだい？

アナトール 何なんだつて——？。さう、君はその女を知つてゐる筈だ。——ある晩僕等は陽氣

な一座でその女と知り合になつた。その時の君の話したと、君はもつとずつと前からその女を知つてゐたのださうだ。

マクス さあ、すると誰だらうな？。僕は随分澤山な女を前から知つてゐる。それに君は洋燈の灯なんぞを使つてその女をお伽噺の中の人間かなぞの様にして了ふ。

アナトール さうだ——此世ではその女はさういふ種類の人間ぢやなかつた。その女はなんだと思ふ——？。思ひ切つて後光を剝がして了はうかな。

マクス それでその女は——？。

アナトール (微笑しながら) その女は——その——

マクス 芝居——？。

アナトール いや——曲馬だ。

マクス 驚ろいた！。

アナトール さうなんだよ——ピアンカなんだよ。僕は今日まで、あの晩以外にあの女に會つた事は、君に言はなかつた。もつともあの晩は僕はあの女には丸で興味がなかつた。

マクス 然し君は本氣にさう信じてゐるのかい、ピビが君を愛したんだつて——？。

アナトール さうだよ、あの女がだよ！。あのお祭騒ぎのあと八日目だか十日目だかに、僕等は



往來で出會した……。その翌る朝女は一座とロシアへ立つ筈になつてゐた。

マクス　ぢやぎりぎりの時だつたんだね。

アナトール　こんな事だらうと思つてゐた、君にはこの話全體が意味も何もなさないんだ。ほんとに君はまだ愛の深祕といふ事を知らないんだね。

マクス　それぢや君は女の謎を何で解く？

アナトール　氣分で解く。

マクス　なるほど——君は薄闇を持つて来るんだね、色硝子の吊洋燈を……ピアノの彈奏を

アナトール　さうだ、それだよ。それが僕に人生を複雑な曲折の饒なものにして呉れるのだ、色がほんの一角で、全世界ががらりと變化するんだから。君には、また何千の外の人にも、この燃えてゐる髪の女はなんでもないに違ひない、吊洋燈だつても君等には又なんでもないに違ひない、君はそれを嘲笑してゐる！。一人の曲馬の女と奥に灯を入れた紅と緑の硝子と！。さう言つて了へば、まつたく魔術は消えてなくなる。それでも人は生きては行くだらう、然し決して何事かを經驗することは出来ない。君等は土足の儘で冒險の中へ無作法に脚を踏み入れる、眼は明いてゐるが心は閉ざされてゐる、だから君等にとつては何事も光彩がないのだ！。ところが僕の魂からは、さうだ、僕からは、何千となく光や色が閃めき出る。君等が唯——五官で受け入れる丈のもの

のを、僕は魂で感じる事が出来るのだ！。

マクス　まつたく魔法の泉だね、君の「氣分」といふのは。君の愛した女は凡てその泉の中へ溜つて行つて君の所へ冒險と珍稀の一種不可思議な匂ひを持つて来る、君はそれを嗅いぢや酔つ拂つてゐるんだね。

アナトール　どうとも勝手にとるが可い。

マクス　然し君の曲馬の女のことだがね、その女が色硝子の吊洋燈の下で必ず君と同じ事を感じたといふ事は、君は恐らく證明することは出来まい。

アナトール　然し僕は、その女が僕の腕の中で感じてゐたことを、必然に曉つてゐるんだ！。

マクス　ねえ君、僕もあの女は知つてゐるんだよ、君のピアノカは。しかも君よりもつとよ

アナトール　もつとよく？

マクス　もつとよく。といふのは僕等はお互に戀をしなかつたから。僕にとつてあの女はお伽噺の中の間ぢやない。僕にとつてあの女は何千もの倫落の女の内の一人なんだ、さういふものに更めて處女らしい純な所を見出したりするのは夢を見る男の空想に過ぎない。僕にとつてあの女は、輪抜けをしたり短い衣裳をつけて最後のカドリルに加はつたりする、何百の女以上の女ぢ



やない。

アナトール さうかね……さうかね……

マクス 事實あの女はそれ以外のものぢやない。是は、僕があゝの女を持つてゐるものを見落してゐるのぢやない、反對に君があゝの女を持つてゐないものを見てゐるんだ。君の魂の生活は饒かで美しい、さういふ君はあゝの女の無價値な心臓の中に自分の空想から生れた若若しさと焰とを注ぎ込んで感じてゐる、君に輝きかけたものは君の光の光なのだ。

アナトール さうぢやない。さういふことも僕には偶にはある。然しその時は違ふ。僕は決してあゝの女を、ありのままを以上に可くしようなどとは思つちやゐない。僕は初めての男でもなければ又最後の男でもなかつた……僕は――

マクス さ、君はなんだつた？……大勢の内の一人だつたんだ。あゝの女は君の腕の中でも又外の大勢の男の腕の中でも同じものなんだ。最高潮時の女といふ！。

アナトール 僕はどうして君に打ち明けたらう？。君は僕を丸で理解してやしない。

マクス いや、さうぢやない。君が僕を誤解してゐるんだ。僕はただかういふ事が言ひたかつたんだ、君がそれに非常に甘い魔術を感じるのはまづ構はない、然し女にはそれが前に幾度もあつたのと同じ事しか意味しない。だつて君、あゝの女にとつてこの世界は何千と云ふ色彩を持つて

ゐるだらうか？。

アナトール 君はあゝの女をよつほどよく知つてゐるのか？。

マクス 知つてゐる。君が一度僕と一緒に出かけたあゝの陽氣な一座で僕等はよく會つた。

アナトール それつきりかい。

マクス それつきりだ。然し僕等は親友だつた。あゝの女には才がある、僕等は一緒に無駄話をする事を喜んだ。

アナトール それつきりかい？。

マクス それつきりだ……

アナトール ……然しなんといつても……あゝの女は僕を愛したんだ。

マクス 先きを讀むことにしようぢやないか。……（小さな包みを取り上げて）「お前の微笑は何を意味するのか、私にそれが分かつたら、碧い眼の女よ……」

アナトール ……しかし、あゝの一座が又此所へ來たつて話だが、知つてゐるかい？。

マクス 來たよ。あゝの女も。

アナトール 本當に。

マクス 間違なし。それに僕は今夜あゝの女に會ふことになつてゐる。

挿

話



アナトール え？。君が？。あの女は何所にゐるか、君知つてるのか？。

マクス 知らない。手紙をよこしたんだ、僕の所へ来る。

アナトール (椅子から飛上がつて)。なんだつて？。然もそれを君はやつと今になつて言つて聞かせるのか？。

マクス 君に関係のあることぢやないぢやないか？。君はさう言つたぢやないか——「自由に獨りに」なりたいつて。

アナトール なあんだ！。

マクス それに魔術の蒸し返しほど悲しいことはない。

アナトール といふのは——？。

マクス といふのは、氣をつけてあの女に會はない様にしたまへと言ふことぢや。

アナトール あの女が又更めて僕にとつて危険になるから？。

マクス さうぢやない——あの時の事が非常によかつたから。君はその甘い思ひ出を抱いて家へ歸りたまへ。人は何事も蘇み返すことを許されない。

アナトール これほど譯もなく會へるのに、會ふのを思ひ切れなんて、君は眞面目で言つてゐるのぢやあるまい。

マクス あの女は君より惻巧だよ。あの女は君に手紙を出さなかつた。……それは恐らく唯あの女が君を忘れてゐたからだらうぢやないか。

アナトール 馬鹿言つてら。

マクス 君はそんなことあり得ないことと思ふのか？。

アナトール そんなこと僕は笑つてゐるよ。

マクス 誰の思ひ出でも、その「氣分」といふ不老不死の靈藥を飲んでゐるとは限らない。君はその靈藥のお蔭で自分の思ひ出をいつまでもいきいきさせてゐるけれども。

アナトール ああ——あの時のあの幾時間！。

マクス え？。

アナトール あれは不滅の時間のうちの一つだつた。

マクス 玄關で足音がする。

アナトール 來たな。

マクス さあ、行きたまへ、僕の寢室を通つて。

アナトール 僕は馬鹿になりたくない。

マクス 歸りたまへ——どうしてまた君は進んで魔術を毀はさせようとするのだ。



アナトール 僕はゐる。(扉を叩く音がする)

マクス さあ!。早く早く!

アナトール (頭を振る)

マクス ぢやこつちへ来てゐたまへ、せめてあの女がいきなり君に顔を合せない様に——こつちへ……(煖爐隠して身體が凡そ隠れる様に、彼を煖爐の方へ押し遣る)

アナトール (煖爐庇に凭りかかりながら) まあいい。(扉を叩く音がする)

マクス お這入り!

アナトール (這入りながら、元氣よく) 今晚は、ねえ、また歸つて来てよ。

マクス (女に手を差出しながら) ビアンカ、晩は、よく来て呉れたね、本當によく!

ビアンカ 貴方手紙を受取つたでせうね?。貴方がおはつよ——然かも一人つきり。

マクス それはどうもありがたう。

ビアンカ それで外の方はどうしてゐるの?。あのザツヘルに集つた連中は?。まだ生きてて?。はねてから又毎晩集まれるでせうか?。

マクス (女の帽子や外套を脱ぐのを手傳つて) でも顔を見せなかつた晩もあつたぢやないか。

ビアンカ はねてから?。

マクス さうさ、はねて直ぐ見えなくなつた時が。

ビアンカ (微笑しながら) あら、そりやさうよ……當り前だわ。……でも、そんなことをそんな風にして言はれるのは好い心持なものね——ちつとも焼餅なしで!。貴方みたいなお友達も持つてゐなくつちやいけないわね……

マクス さうだ、さうだ、持つてゐなくつちや。

ビアンカ 人を苦しめずに、人を愛して呉れる人!

マクス 君にはさういふ人は珍らしいだらうな!

ビアンカ (アナトールの影を認めて) 貴方一人ぢやないのね。

アナトール (出て来てお辭儀をする)

マクス お馴染さ!

ビアンカ (柄眼鏡を眼へ持つて行きながら) あら……

アナトール (寄つて行つて) フロイライン……

マクス ビビ、不意打を喰つてどんな氣がする?。

ビアンカ (少しまごついて、ちよつとのま自分の記憶の中を探す) あら、まつたく、お眼にかかつた事があつたわね……



アナトール ありましたとも——ビアンツェ。

ビアンカ 無論——よく知つてゐただわ。

アナトール (興奮して両手で女の右手を攫み) ビアンカ……

ビアンカ だけでも何所でお目にかかつたのだけ……何所で……あら!

マクス 思ひ出して御覽……

ビアンカ まつたく……さうぢやなかつたかしら……ペテルブルクだつた……?

アナトール (慌だしく女の手を放して) ペテルブルクぢや……なかつたんです……(くるりと

向きなほつて歸りさうにする)

ビアンカ (心配さうにマクスに) あのかたは一體どうしたの!……私失禮なことでも言つた

のかしら?。

マクス あ、狐鼠狐鼠と行つて了……(アナトール奥の扉から消えて行く)

ビアンカ ね、一體どうしたつていふの?

マクス どうしたつて、あの人に分からなかつた?

ビアンカ 分か……分かつちやあるわ、そりや。でも何時何所で會つただか、ちやんと覚えて

ゐないの。

マクス でも、ビビ、あれはアナトールだよ。

ビアンカ アナトール——?。……アナトール……?。

マクス アナトール——ピアノ——吊洋燈……こんな色硝子の……此所の此市中で——三年前

に……

ビアンカ (額を攫んで) 私の眼は何所についてゐただらう?。アナトール!。(扉口へ行く)

挿

あの方を呼び戻さなくちや。……(扉を開けて)。アナトール!。(駆け出して舞臺の奥の段端

にて)アナトール!。アナトール!

マクス (微笑しながら立つてゐたが、扉口まで女の跡を追ふ) どうした?

話

ビアンカ (這入つて來ながら) もう往來へ出たんでせう。御免なさい!。(慌てて窓をあけ

ながら)あすこをあるいてるわ。

マクス (女の後ろから) さうだ、あの男だ。

ビアンカ (呼ぶ) アナトール!

マクス もう聞こえないよ。

ビアンカ (軽く地團太を踏んで) 悪かつたわね。……貴方は非謝まつといて下さいな。私氣

を悪くさせたんだわ、あの人の好い可愛い方に。



マクス ぢや思ひ出した譯なんだね？

ビアンカ え、ちやんと。だけでも……あの方はベテルブルクの誰かに、間違へる位よく似てゐるわ。

マクス (宥める様に) あの男にさう言つとくよ。

ビアンカ それに、三年の間も考へずにて、不意にその人が目の前に現はれたんぢや——そんな一覚えてゐやしない。

ナ マクス 窓を締めよう。寒い風が這入るから。(窓を締める)

ト ビアンカ まだお目にかかれるわね、此所にゐるうちに？

マクス さうさな。然し一寸見せたいものがある。(書卓から例の封筒を取上げ、女の前に差し出す)

ビアンカ これ何？

マクス 花だよ、君がその晩——その晩挿してゐた。

ビアンカ あのかたは是を仕舞つといたんでせうか？

マクス 御覽の通り。

ビアンカ ぢやあのかたは私を愛してゐたのね！

マクス 熱烈に、無限に、永久に——かういふ連中とおんなし様に。(包をさす)

ビアンカ かういふ連中と……おんなし様に！……といふのは？。そりやみんな花？

マクス 花もある、手紙もある、髪のももある、寫眞もある。僕等は今丁度整理してゐたところなんだ。

ビアンカ (癪に觸つた様な調子で) いろいろ分類して。

マクス さうさ、御覽の通り。

ビアンカ ……それで、私は何所に這入るの？

マクス まづ……此所だよ！。(封筒を燂爐の中へ投げこむ)

ビアンカ あら！

マクス (小聲で) アナトール君、僕に出来る丈の、敵はとつたよ……(聲高に) かうして置いて、然し怒つちやいけないよ……まあこつちへお掛け、さうして此三年の間の事を何か話してお聞かせよ。

ビアンカ 今のあれで私怒つちやつたわ！。こんな待遇をされりや！。

マクス 僕は君のお友達なんぢやないか……ビアンカ、こつちへお出で……何か話してお聞かせよ！。



ビアンカ (暖爐の傍の肘掛椅子に腰掛けさせられる) どんなことを?

マクス (女に向き合つて腰掛けながら) 例へば、ペテルブルクのその「似た人」のことも。

ビアンカ 貴方は堪らない方ね!

マクス ぢや……

ビアンカ (膨れて) 一體どんな話をすれば可いんです。

マクス かうして始めりやなんでもない……むかしむかし……さう……むかしむかし大きな大きな都がありました……

ビアンカ (不機嫌さうに) その都に大きな大きな曲馬がありました。

マクス それからそこに小さな小さな女の曲馬師がゐりました。

ビアンカ その女は大きな大きな輪を飛び抜きました……(軽く笑ふ)

マクス 見たまへ……結構旨く行くぢやないか!。(幕が非常に緩やかに下り始める) 棧敷の一つに……さう……棧敷の一つに毎晩毎晩……

ビアンカ 棧敷の一つに毎晩毎晩綺麗な綺麗な……あら!

マクス さ……それから……?

(幕が下りて了ふ)

## 記念の寶石



人物

アナトール

エミール

エミールエの部屋、慎ましやかな優雅な裝飾。暮れがた。窓が明いてゐる、公園が見晴らせる、芽を吹くか吹かぬか位の樹の頂きが、窓越しに聳えて見える。

記念の寶石

エミールエ ……あら……貴所此所にゐるの——！。然かも私の書卓デスクの前に……？。さうして、何をしてゐるのよ？。抽斗を掻き廻してゐるんぢやないの？。……アナトール！。

アナトール 掻き廻すのは私の正當な権利だ——然かもやつて見てよかつた、かうなんだから。

エミールエ それで——何か見つかつたの——？。御自分の手紙でせう……！。

アナトール なんだつて！。——ぢや、この是は——？。

エミールエ 是はとは——？。

アナトール この小さな二つの寶石は……？。一つは紅玉ルビー、こつちの方は黒い？。——二つとも



94 私は知らない、二つとも私がやつたんぢやない……!

エミール エ……知らないわ……わたし……忘れちまつたわ?……

アナートル 忘れた?。……さもさも大事さうに仕舞つてあつた、この一番下の抽斗の隅に。みんなのやうに嘘をつかずと、包まず白状して了ふが可い。……さうか……お前は黙つてゐるんだね?。なんだ、憤つた様な顔をして見せて。……自分に覺えがあつて手も足も出ないとき、一番樂に出来る事は、黙つてゐることなんだ!。……然し俺は追及する。お前は外の飾りを何所に隠してゐる?。

ト エミール 私は外になんにも持つてやしません。

アナートル ぢや——(抽斗を掻き廻し始める)

エミール およしなさいよ……ほんとに私なんにも持つてやしないんだから。

アナートル ぢやこの是は……この是はどうした?

エミール 私が悪かつたわ……もしかすると……!

アナートル もしかすると!。……エミールエ!。明日は二人が結婚しようといふ今夜だぜ。俺は過去の事はすっかり消えて了つたものだど計り思つてゐた。……すつかり。……お前と一緒に俺は、まだお互に知り合にならなかつた時分の事を俺に思ひ出させる様な、手紙だの扇子だのそ

の外色ろんな細細したもののを……お前と一緒に俺は、そんなものを一切燄爐の火の中に投げ込んで了つた。……腕環だの指環だの耳環だの……さういふものは人に呉れたり、棄てて了つたりした。橋の上から河の中へ飛んで行つたのもある、窓から往來へ飛んで行つたのもある。……此所に寝てゐてお前は俺に誓つた。……「今までの事は凡て棄てて了ひます——私は貴方の腕の中で、初めて戀といふものはどんなものかといふことが分かりました……」と。俺は無論お前の言ふ事を信じた……男は、男を有頂天にする女の最初の嘘を初めとして、女の言ふ事は皆信じるものなんだから。……

エミール もう一度誓を立てろとおつしやるんですか?

アナートル それが何になる?。……もうお仕舞ひだ……お前との事はお仕舞ひだ。……まつた右くお前は芝居が上手だつたなあ!。手紙だのリボンだのその外の細細したものが燃えて上つたとき、お前は過去の汚染をそれがどんなに小さくつてもすつかり洗ひ落して了ふといふ顔をして、此所で焔の前に熱病やみの様になつて立つてゐた。……それから、一緒に河岸を散歩して、その高價な腕環を黒ずんだ水の中に投げ込んで、それが忽ち見えなくなつたとき、お前は俺に抱かれてしやくり上げて泣いた……その時お前はどんなに泣いたらう、清めの、悔改めの涙を。……それは實は下らない狂言だつたんだ!。いくらそんなことをしたつて何の役にも立たないといふこ



とに気がつかないのか？。お前がなんと云はうと俺はお前を信用してゐやしなかつた。……だから俺が此所を掻き廻して見る事も當然の事だつた。……なぜお前は口を利かない？……なぜお前は辯解しない？。……

エミールエ 貴方は私を捨てる氣であらつしやるんですもの。

アナートル 俺が聴くのはそんな事ぢやない、この二つの寶石はどうしたものだ……どうしてお前はこの二つ丈を仕舞つて置いたんだ？。

エミールエ あなたはもう私を愛してゐらつしやらない……？。

アナートル 本當の事をいふんだ、エミールエ……本當の事を言はなけりや承知しない！。

エミールエ 私を愛してゐらつしやらないのなら、言つたつて何になります。

アナートル 本當の事を聞いて見れば、其所に何か出て来るかも知れない——

エミールエ え、どんなことが？。

アナートル 俺の……得心の行く様なことが……ねえ、エミールエ、俺はお前を悪者にする興味はない！。

エミールエ あなた私を赦して呉れる？。

アナートル 言つて御覽よ、この寶石はどうしたものだ！。

エミールエ 言つたら赦して呉れるの——？。

アナートル この紅玉はどうしたものなんだ、どうしてお前は是を仕舞つて置いた——

エミールエ ——そして、黙つて聴いてゐる？。

アナートル ……うむ！。……が、兎も角話すが可い……

エミールエ ……此紅玉は……メダイヨンにくつついてゐたの……それが……とれておつこつたの……

アナートル そのメダイヨンは誰のだ——？。

エミールエ そんなことどうだつて可いぢやありませんか。……ただ私がそれをある……ある日に頸に——一寸した鎖に下げて……頸にかけてゐました。

アナートル 誰から貰つた——！。

エミールエ そんなことどうだつて可いぢやないの……たしかお母さんからだつたと思ふわ。……

……ねえ貴方、もし私が貴方の思つてらつしやる様な悪者だつたら、私は貴方に屹度さう云つたでせう、是はお母さんから貰つたものだから、だから私は仕舞つて置いたんですつて——さうすると貴方は屹度本當だと思ふでせう。……然し私はこの紅玉を仕舞つて置いたんです、それは……

……ある日に私のメダイヨンから、……私には大事な……思ひ出になるメダイヨンからおつこつた

アナートル そのメダイヨンは誰のだ——？。

エミールエ そんなことどうだつて可いぢやありませんか。……ただ私がそれをある……ある日に頸に——一寸した鎖に下げて……頸にかけてゐました。

アナートル 誰から貰つた——！。

エミールエ そんなことどうだつて可いぢやないの……たしかお母さんからだつたと思ふわ。……

……ねえ貴方、もし私が貴方の思つてらつしやる様な悪者だつたら、私は貴方に屹度さう云つたでせう、是はお母さんから貰つたものだから、だから私は仕舞つて置いたんですつて——さうすると貴方は屹度本當だと思ふでせう。……然し私はこの紅玉を仕舞つて置いたんです、それは……

……ある日に私のメダイヨンから、……私には大事な……思ひ出になるメダイヨンからおつこつた



んだから……

アナトール ……それから！

エミリーエ ああ、貴方に話して了へたら、私も淫淫するんだけど。——ね、貴方、初戀の事で貴方に焼餅を焼いたとしたら、貴方私を笑やしない？

アナトール といふのは？

エミリーエ でもその思ひ出には、甘い味が、苦痛ぢやあるけれども絞して貰ふ様な味があるんですもの。……それに……私にはその日は大事な日だったんです、その日に私は情といふものを——私と貴方とを結びつけてゐる情といふものを教はつたんだから。ほんとに、私と貴方としてゐる様な戀は、一度戀といふものを教はつて来たものでなくつちや出来ない戀です！。……お互にまだ戀といふ事を知らない時分に會つたとして御覽なさい、屹度私達はお互に目もかけずに摺れ違つたに違ひない！。……ああ、頭を掉つちやいけない、アナトール。その通りなんです、いつか貴方も御自分でさうおつしやつた——

アナトール 俺が自分で——？

エミリーエ その方が反つてよかつたとも言へる、と貴方はおつしやつた、是程の深い戀をするには、それだけの修業が要るんだからつて！

アナトール さうだ……俺達が墮落した女と戀をする時には、いつでも何かさういふ風な氣休めを拵らへておくのだ。

エミリーエ 包まず言つて了ひます、この紅玉はその日の思ひ出なんです……

アナトール ……それから……それから……

エミリーエ ——それつきりです……それつきりよ……アナトール……その日の思ひ出なの……

……ああ……私はほんの子供だった……十六で！

アナトール 男は二十歳で——脊が高く眼が黒くて……

エミリーエ (無邪氣に) もう忘れたわ、あなた……覚えてゐるのは、周圍のざわついてゐた

森と、梢越しに笑つてゐた春の空だけなの……さうさう、茂みを洩れて黄色い花のかたまつてゐる上にちらちらしてゐた日の光も覚えてゐる——

アナトール それでお前はその日を、お互が知り合ひになる前に、お前を俺から奪つて行つたその日を、呪ふ氣にはならないのか？

エミリーエ 貴方がゐたら私は貴方のものになつてゐたに違ひない……！。でもね、アナトール……どんな事があつても、私はその日を呪ふ氣にはならないの、また、自分が呪つた様な事言つて貴方を誤魔化すのは卑しい事だとも思ふの……アナトール、私が貴方を誰よりも愛してゐる



るといふこと——また貴方ほど愛せられた人は誰もゐないといふこと——さういふ事は貴方によく分かつてゐる事ぢやありませんか：然し假令貴方の初めてのキッスの爲に私の今迄に経験した事が何も彼も無意味になつて了つても——私の會つた男の誰も彼も私の記憶から消えて了つても——私は私を初めて女にした時の事を忘れることが出来るでせうか？。

アナトール 然かもお前は猶俺を愛してゐる様なことを言ふのか——？。

エミリーエ 私はその人の相恰もよく思ひ出せないのです、どんな眼つきをしてゐたかといふことも忘れてゐます——

アナトール 然かもお前がその男の腕の中で處女の惱みを笑ひ消したといふこと……その男の心臓からお前の心臓に、「胸をときめかせてゐる娘」を「世の中を知つた女」にする、暖かなものが初めて注ぎ込まれたのだといふこと、さういふことをお前は忘れることが出来ないんだね、恩知りさん！。然かもお前は、さういふ白狀が俺を氣狂ひにするといふことも、今まで睡つてゐた過去を急にすつかり又揺ふり起すのだといふことも、氣がつかないのだ！。……さうだ、今になつて俺には又分かつた、お前は俺のキッス以外に外の男のキッスも想像することが出来るんだ、俺の腕に巻かれて眼を瞑つてゐるときでも、お前の眼の前には俺の姿以外に外の男の姿が映ることもあるんだ！。

# 欠



別れの晩餐

欠



## 人物

アナトール

マクス

アンニー

給仕

料理店ザツヘルの特別室。アナトールとろち扉口に立つて給仕に言ひつけてゐる。マクスフオイ肘掛椅子イに凭つかかつてゐる。

マクス おい——まだ済まないのか——？。

アナトール ……いますぐ！。——ぢやすつかり可いね？。——（給仕去る）

マクス （アナトールが部屋の眞ん中に来たとき）それで——もしあの女が来もしなかつたら！。

アナトール 「来もしない」たあどういふことなんだ！。——今は——今は十時だ！。——今ごろどうしたつて来られ様はないぢやないか！。



マクス 舞踊はとうに済んで居る。

アナトール 然し君——装顔を直す時間もある——著更へをする時間もある！——兎に角表へ出て——待ち受けるよ！。

マクス 甘やかしかちやいかんよ！。

アナトール 甘やかす！。若し君が知つてゐたら……

マクス 知つてゐるよ、知つてゐるよ。君はあの女を邪慳に取扱つてゐる。……それが甘やか

すことの一種ぢやないともいふ様に。

アナトール 僕の言はうとした事は、丸で別な事なんだ！——さうだ……若し君が知つてゐた

ら……

マクス ぢや早く言つて了ひたまへ……

アナトール 僕は非常に嚴肅な氣持になつてゐる！。

マクス つまりあの女と結婚の約束でもしようといふんだらう——？。

アナトール いや、さうぢやない——もつと嚴肅な！。

マクス 明日結婚する？。——

アナトール さうぢやない、どうして君はそんなに外面的なんだらうな。——外から来るそんな

凡ての下らない事とは全然關係のない、魂にとつて嚴肅な事といふものなぞ存在しようがないとでも思つてゐる様に。

マクス ぢや——君は君の感情の世界で、今まで世間に知られてゐなかつたものでも發見したのか——え？。そんな事があの女に分かる事だとも思つてゐる様に！。

アナトール 下手だね、推量が……僕は唯單に……「最後」の式を擧げるんだ！。

マクス へえ！。

アナトール 別れの晩餐だ！。

マクス それで——僕の役割は——？。

アナトール 君は僕等の戀の、眼を瞑らせて呉れるんだ！。

マクス おい君、さういふ可厭な比喻は止したまへ！。

アナトール 僕はこの晩餐をもう一週間許り延ばし延ばししてゐる——

マクス ぢや君は今日は大分腹が減つてゐる譯なんだね……

アナトール ……といふのは……此一週間……僕等は毎晩一緒に夕飯を喰つてゐたんだ——然し

——言葉が、うまい言葉が見つからなかつた！。僕にはそれが言ひ出せなかつた……それが人をどんなに苛苛させるものか、君には到底想像も出来まい！。



マクス 然し本當に君はなんのために僕のゐる事が必要なんだ！。君の臺詞の後見でもするの  
かい——？。

アナトール 色んな場合の爲に君はゐて呉れる必要がある——事によると、君の手を借りなくつ  
ちやならない——君は圓滑にしたり——荒立てない様にしたり——呑み込める様にして呉れるの  
だ。

マクス どうしてさういふことになつたのか、先づそれを聞いて置く必要があるな——

アナトール 喜んで！。……あの女が退屈になつたんだ！。

マクス ぢや外に面白い女が出来たんだね——？。

アナトール さうだ！。

マクス さうか……さうか……！。

アナトール どんな女だと思ふ！。

マクス 型の女——！？。

アナトール どうしてどうして！。……斬新な——獨特な！。

マクス さうだねえ。……いつでもやつとお仕舞に近づいて型の女にはなるものだからね……

アナトール 君かういふ女を想像して見たまへ、——なんて言つたら可いかな……四分の三拍子

の——

マクス なんとか言ひながらやつぱり舞踊の影響が抜けないぢやないか！。

アナトール さうだなあ……僕はどうも君にうまくヒントを與へてやる譯に行かない……その女  
は、さうだね、僕に調子を押へた維也納ワルツを思ひ出させる——涙脆い快活と言ふか……微笑  
してゐる、悪戯らしい憂鬱と言ふか……ともかくそんな心持のする女なんだ……小さな、可愛  
い、ブロンズの髪の毛、ね、君……さういふ……さ、どうもうまく言へないな！……その女の傍  
にゐると暖かい落ついた心持になる……董の花束を持つて行つてやつたら、その女は眼の縁に  
涙をためた……

マクス ぢや つ腕環で試して見たまへ！。

アナトール ……あ、君——今度はそんなことはいけないんだよ——君は勘違ひをしてゐる——  
まつたく……その女とは僕は此所で飯を喰はうとは思はない……あの女には郊外の小料理  
屋が、ちんまりした小料理屋が似つかはしい——無趣味な壁紙が貼つてあつて、隣の卓には小役  
人がかけてゐるといふ様な！——僕は此頃毎晩そんな所をその女と一緒にゐてゐた！。

マクス なんだつて？——君はたつた今言つたぢやないか、アンニーと——

アナトール さうだ、それもさうだつたんだ。自然僕は先週は毎晩二度づつ夕飯を喰つた、手に



入りたいと思つてゐる女と——それから手を切りたいと思つてゐる女と。……ところが残念な事にどつちもまだ思ひ通りにならない……

マクス　ねえ君。——アンニーを一遍その郊外の小料理屋へ連れて行つて——そのプロンドの今度の女をこのザツヘルへ連れて来て見たまへ……さうすると旨く行くかも知れない！

アナトール　君は今度の女をまだ知らないから、そんなことを言つてゐるのだ。あの女は無慾そのものなんだよ！——ほんとに君——あの女は——君に見せてやりたいよ、例へば、僕がもつと良い酒を注文しようとする……その女はどうすると思ふ！

マクス　眼の縁に涙をためる——んぢやないか？

アナトール　いけませんつて言ふんだ——なんとやつても、なんとやつても！……

マクス　ぢや君はこのごろマルケルスドルフを飲んでるんだね——？

アナトール　さうだ、十時前は——それからは無論シャンパンだ、人生はそんなものなんだ！マクス　いや……お言葉だが……人生はそんなものぢやないよ！

アナトール　想像して呉れたまへ、この矛盾を！。然も僕はこの矛盾を飽きる程嘗めつくしてゐるんだ！。——是は結局、俺は要するに恐ろしく正直な人間だたと自分で氣がつく、例の場合の一つに外ならない——

マクス　さうかな！。……へえ！。

アナトール　僕はもう是以上こんな二た途を續ける勇氣がない……僕は自尊心をすっかり失くしてふ……！。

マクス　君が！。——失くするのは僕だけ、僕だ、僕だ……僕の前で茶番をするのは止してくれたまへ！。

アナトール　どうして——折角来て呉れてゐながら……然し眞面目なところ……僕は、もうなんの感じもなくなつてゐるのに、愛がある様な顔をしてゐることは出来ない！。

マクス　君がそんな顔をするのは、まだ多少愛を感じてゐる時に限る……

アナトール　僕はアンニーに正直にさう言つて置いた。いきなり——いきなり、ほんの始まりに……お互にいつまでも渝るまいと約束する様に。可いかい、アンニー——二人の内のどつちかが、そのうち、もうお仕舞になつたのだと氣がついたら——それを相手に包み隠さず打明けるんだぜ……

マクス　へえ、何日までも渝るまいと約束する筈の瞬間に、君等はさういふ取極めをした譯なんだね……そりや結構だ！。

アナトール　僕は又かういふ事を幾度も女に繰返した。——俺達はお互に些しの義務も持つては



居ない、俺達は自由なんだ！。お互の時が来たら、お互に大人しく別れよう——ただ嘘だけはいけない——嘘は俺は大嫌ひだ！。……

マクス それぢや君なんでもないぢやないか——今日は！。

アナトール なんでもない！。……今となつて、僕がそれを言ひ出さなけりやならない今となつて、僕は自分で自分が信用出来なくなつたんだ。……さうは言つてゐても、あの女は屹度悲しい思ひをするに違ひない。……僕は涙には堪へられないんだ。——あの女が泣いたら、僕は結局又更めてあの女に惚れる——すると僕は片つぽの方を欺すことになる！。

マクス いかんいかん、ただ嘘だけはいけない——嘘は俺は大嫌ひだ！。

アナトール 君が傍にゐて呉れると、凡てがずつと無理がなく運ぶに違ひない！。……君からは冷たい健全な「快活」の息が漂よつて出る、別れの「涙脆さ」なんぞ、その息がかかれば屹度凝まつて了ふ！。……君の前では誰も泣かない！。

マクス よし、僕がひきうけた——が、君のためにしてやる事といふのは、それ丈の事なんだらうね。……あの女に話をする？。——いかん、いかん……そいつあ御免蒙る——僕の主張に背く事なんだから……君は少し人が好すぎるよ……

アナトール ねえ、マクス——ある程度それもやつて貰ひたいんだが。……あの女にさう言つて

呉れたまひな、僕を失くしたところで別に大した損にやならないつて。

マクス さう——その位は言つても可い——

アナトール それからかういふ事も、外に男は何百となくある——もつと綺麗な——もつと金のある——

マクス もつと伶俐な——

アナトール いけないいけない——願ひだ——茶化しちやいけない。——（給仕が扉を開ける。

アンニーが這入つて来る、雨外套を引つかけて、白のボアをして。手には黄色い手套を穿めてゐる、広い目覚ましい帽子の鏝を無雑作に折り返してゐる）

アンニー あら——今晚は！。

アナトール アンニー、今晚は！。……御免よ——

アンニー 本當に貴方つかたは當になるかたね！。（雨外套を放り出す）——私方方探したわ

——右も——左も——誰もゐないの——

アナトール ——でもいい鹽梅そんなにまごつきやしなかつたらう！。

アンニー 約束は守るものよ！。——今晚は、マクス！。——（アナトールに）ね、——出させて置いてもよかつたのに……



アナトール (女を抱擁する) 肌着を着てゐないね?。——

アンニー ぢや——「盛装」して来なくつちやいけなかつたの——貴方のために?。——御免なさい——

アナトール 俺は構はないさ——然しマクスになんとか言はなくつちや!

アンニー どうして?。——このかたそんなこと氣にしやしくつてよ——焼餅やきぢやないんだから!。……さあ……さあ……食べませうよ——(給仕が扉を叩く) お這入り!。——今日は叩くのね——何日もはそんなこともしない癖に!。(給仕這入つて来る)

アナトール 仕度をして呉れ!。——(給仕去る)

アンニー 貴方今日は来なかつたの——?

アナトール ああ——用があつて——

アンニー そんな惜いものでもなかつたわ!。——今日は何もかもそりや眠くなる様な……

マクス 前の方のオペラはどんなものだつたの?

アンニー 知らないわ。……(皆食卓につく)……私自分の部屋へ這入つて——それから舞臺に

出たんですもの——なんにも氣をつけて見なかつたわ……なんにも!。……それから、アナトール、私貴方に言ふことがあつてよ!

アナトール さうかい?。——何か非常に大事なこと——?

アンニー え、少し!。……貴方びつくりするかも知れない……(給仕運んで来る)……

アナトール さう言はれると一刻も早く聴きたくなる!。……もつとも俺の方にもある……

アンニー まあ……待つてらつしやい……あの人が聞いたつて仕様がなから——

アナトール (給仕に) あつちへ行つて呉れ!。呼鈴を鳴らすから!。(給仕去る)……さ、

それで……

アンニー ——え……ねえ、アナトール……貴方びつくりするわよ。……もつともさうね!

のびつくりなんぞしやしくつてよ——びつくりさせる譯のものぢやないわ……

マクス 昇給?。

アナトール 腰を折つちやいけないよ……!

アンニー ねえ——アナトール……當てて御覽なさい、是オステンドだかホワイトステールだか?。

アナトール また牡蠣の事を言ひ出した!。オステンドだよ。

117  
アンニー 私もさうだともつてたわ。……ああほんとに私牡蠣が大好き。……なんてつたつて是より外毎日毎日食べてゐられるものはない!



マクス ゐられる!?。——ゐなけりやならない!。ゐなけりやゐられない!!。  
 アンニー さうでせう!。私もさう思ふわ!  
 アナトール お前は何か非常に大事なことを俺に話すと言つて——?  
 アンニー えゝゝゝ大事なこととは大事なことなの——非常に大事な!。——貴方私に言つたことを覚えてゐて?

アナトール どの——どのこと?。——お前がどれのことを言つてゐるのか、俺には見當がつかない!。

マクス そりやあの人の言ふ通りだよ!

アンニー さうね、私の言ふのは貴方から言つたゝゝ待つて下さいゝゝさあなんて言つたつけ

——アンニー、つて貴方が言つたわゝゝ俺達はどんな事があつてもお互に嘘はつきたくないゝゝ;  
 アナトール さうだゝゝさうだゝゝそれで!

アンニー いろんなことがあつても嘘はつかない!。ゝゝそれ程なら本當のことを包まずすつかり言ふが可いつてゝゝ;

アナトール あゝゝ言つたよゝゝ;

アンニー 然し若しそれが手遅れになつたら?。——

アナトール なんだつて?

アンニー あら——まだ手遅れにはなつちやゐない!。——丁度可い時に言ふんだわ——一寸一機はつきりといふ丁度可い時に。ゝゝ明日になつたらもう手遅れになるかも知れない!

アナトール アンニー、お前氣でも狂つたのか!?

マクス どうしたんだつて?

アンニー アナトール、貴方牡蠣を食べてゐなくつちやいけないゝゝさうしなけりや私言はないからゝゝなんにも!

アナトール どういふ事なんだ?。——「ゐなくつちやいけない」といふのは——

アンニー 食べること!!。

アナトール 話をしろゝゝそんな悪巫山戯わづらひは眞つ平だ!

アンニー それで——約束はもう出来てたんだわね、さういふ時が来る様なことがあつたら——お互にちゃんと大人しくその事を言ふんだつて事は。ゝゝところが今丁度さういふ時が来たんです——

アナトール といふのは?

アンニー といふのはね、貴方と一緒に御飯を食べるのも、濟みませんが、今日がお仕舞だとい



ふ事なの！。

アナトール お前に親切はあるだらうな——もつと詳しく説明して呉れる！。

アンニー お互の仲はお仕舞になつたんです——お仕舞にならなけりやなくなつたんです！

アナトール さうか……その——

マクス こりや面白い。

アンニー 何所が面白いつておつしやるの？。——面白いつて——面白くないつて——とにかくさうなつてゐるんだから！。

アナトール ね、おい——俺にはまだよく納得が出来ないんだが……お前は結婚の申込みでも受けたのか……？。

アンニー あら、そんな事だつたら！。——そんなことだつたら何も貴方とお別れにする必要はないぢやありませんか。

アナトール お別れにする！。

アンニー さうね、ぶちまけちまわなけりやね。——私惚れつちまつたの——アナトール——夢中になる程惚れちまつたの！。

アナトール 伺ひたいね、誰に？。

アンニー ……マクス、どうしたんです——どうしたことなら貴方は笑つてゐるんです？。

マクス あんまり可笑しいから！。

アナトール マクスなんぞりつちやつとけ。……二人きりで話をするんだ、アンニー！。——お前は説明する義務があると思ふ……

アンニー え、——ちやんと説明するわ。……私は外の男に惚れちまつたの——さうして其事を包み隠ししらずに貴方に言つてゐるの——私達の間ではさうする約束だつたんだから……

アナトール さうだ……が畜生——相手は誰だ！。

アンニー ね、あなた——無作法になるもんぢやなくつてよ！。

アナトール 俺は訊く……遮二無二訊く……

アンニー マクス、お願い——呼鈴を鳴らして頂戴——私お腹が空いて堪らない！。

アナトール そんなことまで！。——腹が減る!!。——こんな話をしてゐて腹が減る！。

マクス (アナトールに) この人は今日初めて晩飯を食ふんだよ！。(給仕這入つて来る)

アナトール 何か用か？。

給仕 呼鈴が鳴りましたから！。



マクス どんどん持つて来て呉れ！。(給仕皿を片付けてゐる)

アンニー さうさう……カタリニは獨逸へ行くんですよ……もう定まつてるの……

マクス さうかい……それで、ただ遣つて了ふのかな？

アンニー さ……ただつて——そりやどうだか分からないわ！

アナトール (立上がつて部屋の中をあるき廻る) 酒はどうした!?。——おい!。……ジャン!!。

——今日はお前どうかしてゐるな!

ナ 給仕 失禮ですが——酒は……

ト アナトール 俺は卓の上にあるその事を言つてゐるんぢやない——分つてゐるさうなものぢやないか!。——シャンパンのことだよ!。——食事の初めに飲むんだつて言つたらうが!。(給仕去る)

ル アナトール さあ説明して貰はうか!

アンニー 貴方がた男のかたつてちつとも當にならないものね、丸で——是つぼちも!。——あんなに立派に私に言つて聞かせて置いて。もうお仕舞になつたと氣がついたら、——さうしたらお互にさう言つて大人しく別れようつて——

アナトール とにかくお前はすつかり俺に——

アンニー さあ是が——この人の「大人しく」なんですつて!

アナトール 然し、ね、おい——かういふ事はお前にも分かるだらう、俺は訊きたいんだ——誰が——

アンニー (葡萄酒を徐ろに啜る) ああ……

アナトール 飲んで了つてから……飲んで了つてから!

アンニー ね、そんなに長いこと待つてる——

アナトール いつも一息に飲んでゐるんぢやないか——

アンニー でもね、アナトール——私は今日はボルドーともお別れなの——いつになつたらお目にかかれるか。

アナトール 畜生!。——なんて事を言つてゐるんだ!。……

アンニー 是からは屹度ボルドーも飲めない……牡蠣も……シャンパンも!。(給仕が次の料理を持つて来る)——フイレー、ゾー、ツリユーフも!。——何もかもお仕舞になつちやつた……

マクス おやおや君の胃袋はなかなかセンテイメンタルだな!。(給仕が持つて来たので)——取つてあげようか?。——

アンニー え、難有う!。ぢや……

アンニー 是からは屹度ボルドーも飲めない……牡蠣も……シャンパンも!。(給仕が次の料理を持つて来る)——フイレー、ゾー、ツリユーフも!。——何もかもお仕舞になつちやつた……

マクス おやおや君の胃袋はなかなかセンテイメンタルだな!。(給仕が持つて来たので)——取つてあげようか?。——

アンニー え、難有う!。ぢや……

アンニー 是からは屹度ボルドーも飲めない……牡蠣も……シャンパンも!。(給仕が次の料理を持つて来る)——フイレー、ゾー、ツリユーフも!。——何もかもお仕舞になつちやつた……

マクス おやおや君の胃袋はなかなかセンテイメンタルだな!。(給仕が持つて来たので)——取つてあげようか?。——

アンニー え、難有う!。ぢや……



アナトール (巻煙草に火をつける)——

マクス もう食べないのか？

アナトール 一先づ止める！。(給仕去る)……それで、その仕合せな男は誰なんだか、聞かせて貰ひたいね！。

アンニー 言つたところで——すぐ忘れる様な名前ですよ——

アナトール それぢや——その男は何をしてゐるんだ？。——どうして知り合ひになつた？。——どんな様子をしてゐる——？。

アンニー 綺麗なの——畫にかいた様に綺麗なの！。それ丈なのよ……

アナトール それで——お前はそれだけで澤山だと言ふんだね……

アンニー さうなの——もう牡蠣も食べられない……

アナトール そりやもう聞いたよ……

アンニー ……それからシャンパンも！。

アナトール 然し、畜生——然しその男は、牡蠣やシャンパンの金が拂へないといふこと以外に、まだ何か特徴を持つてゐるのだらう——

マクス そりや君のいふ通りだ——そんなことは實際「仕事」ぢやない……

アンニー 仕事なんぞどうだつて可いぢやありませんか——私が愛してさへゐれば？。——私はもうなんにも要らない——こんな事は今までになかつた事なの——今までに経験したことのない事なの。

マクス 然しね……拙い食物たべものがほしいのなら、アナトールだつて差上げますぜ！。——

アナトール その男は何なんだい。——番頭かい？。——煙突掃除かい——。——放火泥棒かい——。

アンニー ね、あなた——あのひとを侮辱すると承知しないわよ！。

マクス 早く言つたら可いぢやないか、その人が何なんだか！。

アンニー 藝人キリストワーなの！。

アナトール なんの？。——輕業師かい？。——お前にや丁度似合ひかも知れない。——曲馬の連中——かい？。曲馬師かい。

アンニー 勝手な事言ふのは止して下さい！。——その人はね、私の仲間ですよ……

アナトール ぢやあ——古い馴染なんだね？。……もう何年となく毎日毎日會つてゐた男なんだらう——さうして大方その男と一緒になつて長いこと俺を欺してゐたんだらう！。——

アンニー それなら私貴方になんにも言やしないわ！。——私は貴方の言葉を信用してゐたんで

——。

アンニー ね、あなた——あのひとを侮辱すると承知しないわよ！。

マクス 早く言つたら可いぢやないか、その人が何なんだか！。

アンニー 藝人キリストワーなの！。

アナトール なんの？。——輕業師かい？。——お前にや丁度似合ひかも知れない。——曲馬の連中——かい？。曲馬師かい。

アンニー 勝手な事言ふのは止して下さい！。——その人はね、私の仲間ですよ……

アナトール ぢやあ——古い馴染なんだね？。……もう何年となく毎日毎日會つてゐた男なんだらう——さうして大方その男と一緒になつて長いこと俺を欺してゐたんだらう！。——

アンニー それなら私貴方になんにも言やしないわ！。——私は貴方の言葉を信用してゐたんで



す——だから私すつかり貴方に打明けたんだわ、手遅れにならない前に！。

アナトール 然し——お前は長いこと——いつからだか知らないが——その男に惚れてゐたんだ。  
——さうして心の中でお前は長い間俺を欺してゐたんだ！。——

アンニー それを禁める譯には行きませんよ！。

アナトール お前は……

マクス アナトール！！。

アナトール ……俺はその男を知つてゐるのか？。——

アンニー さうね——屹度貴方の眼にはつかかなかつたでせう……コーラスに這入つて踊る丈なんだから。……でもあの人は出世するわ——

アナトール いつから……その男はお前の氣に入つた——？。

アンニー 今日の晩から！。

アナトール 嘘言へ！。

アンニー 本當です！。——今日私は……さう感じたの、是が私に定められた運命だつて……

アナトール 定められた運命！。マクス、聞いたかい——定められた運命だつて！！。

アンニー さうよ、さういふのだつて運命ですからね！。

アナトール おい——然し俺は一仕始終を訊く——俺には訊く権利がある！。……この瞬間はお前はまだ俺の戀人なんだ！。……俺は聞く、いつからこの事件は持ち上がったのか……どうして始まつた……いつその男は氣振りを見せた——

マクス さうだ……まつたくさういふ事を話した方が可い……

アンニー 正直にしてゐると、こんな目に遇ふ！。……ほんとに——あの男爵を欺してゐるフリツツエルの眞似をしてればよかつた——男爵はまだなんにも知らない——フリツツエルはもう三月も前から五聯隊の中尉とくつき合つてゐるのに！。

アナトール 今に感づくよ、男爵だつて！。

アンニー さうかも知れないわ！。でも貴方にや決して感づけない、決して！。——それには私  
餐が賢すぎるし……貴方は又馬鹿すぎるから！。(葡萄酒を一杯注ぐ)

アナトール 酒はもう止すが可い！。

アンニー 今日は止さない！。——微醉になつて見たいの！。——何しろ最後の……

マクス 來週の今日迄は！。

アンニー 永久に！。——私カールの傍にゐるつもりだから、私本當にあの人が好きなんだから——お金がなくなつてもあの人は賑やかな人なんだから——あの人は私に退屈させる事がなささう



なんだから——あの人は可愛い、可愛い——好いたらしい男なんだから!。——  
 アナトール お前は約束を守らなかつたんだ!。——もう長いことお前はそ男に惚れてゐたんだ!。——その今夜なんていふのは、辻褃の合はない出鱈目なんだ!

アンニー 可いわ、出鱈目にしてお置きなさい!

マクス ね、アンニー……兎も角その話をしてお了ひよ。さうぢやないか——言ひ出すからにはすつかり言はうし——言はない程ならなんにも言はないが可いぢやないか!。——若し大人しく別れたいといふ氣があるなら——この男の、アナトールのために、すつかり言つてやる義務がある……

アナトール さうしたら俺の方でもお前に言ふ事がある……

アンニー さうね……初まりは實はかうなの……(給仕這入つて来る)……

アナトール 構はない——構はない……(女の傍にかける)

アンニー もう二週間にも……もつとその上になるかも知れない、あの人が私に薔薇の花を呉れたの——出口の所で……私思はず噴き出しちまつたのよ!。——そりやその時の様子つたら、いやに慄慄してゐて——

アナトール どうしてお前はその事を些とも俺に話さなかつた——

アンニー その事を?。——でもそんな事を一言つてゐた日にや大變ですもの!

アナトール それで、それから——それから!

アンニー ……それから稽古のときになるとあの人は始終妙に私の傍をこそそこそあるいてゐるぢやありませんか——さ——それに私氣がついたの——初めの内は腹が立つた——それから仕舞には嬉しくなつた——

アナトール 大そう簡単に……

アンニー それで……それから私達は話をしたの——さうしたらあの人がすつかり氣に入つて了つたの——

アナトール 二人でどんな話をした?。——

アンニー 色んな事を——あの人の學校を追ひ出された話とか——奉公に住み込ませられた話とか——それから——段段芝居熱に浮かされ出した時の話とか……

アナトール さうか……然もそんな事俺は些しも聞かされなかつた……

アンニー それから……それからかういふ事も分かつたの、私達は子供の時分二軒置いて隣り合つて住んで居たのが——私達は隣同士だつたのよ——

アナトール へえ!。隣同士!。——涙がこぼれさうだね、涙が!

アンニー ……それから稽古のときになるとあの人は始終妙に私の傍をこそそこそあるいてゐるぢやありませんか——さ——それに私氣がついたの——初めの内は腹が立つた——それから仕舞には嬉しくなつた——

アナトール 大そう簡単に……

アンニー それで……それから私達は話をしたの——さうしたらあの人がすつかり氣に入つて了つたの——

アナトール 二人でどんな話をした?。——

アンニー 色んな事を——あの人の學校を追ひ出された話とか——奉公に住み込ませられた話とか——それから——段段芝居熱に浮かされ出した時の話とか……

アナトール さうか……然もそんな事俺は些しも聞かされなかつた……

アンニー それから……それからかういふ事も分かつたの、私達は子供の時分二軒置いて隣り合つて住んで居たのが——私達は隣同士だつたのよ——

アナトール へえ!。隣同士!。——涙がこぼれさうだね、涙が!



アンニー え、さう……え、さう……(飲む)

アナトール ……それから!

アンニー それからどうなるものですかね? ——私もうすっかり言つて了つたんですもの!。是が私に定められた運命なんです——だから、運命に背いて……私はなんにもする事が出来ない……だから……運命に……背いて……私は……なんにも……する事が……出来ない……

アナトール 今夜の事を俺は聞きたいんだ——

アンニー さう……一體何が——(女の首がだらりとする)

マクス 眠ちまつたぢやないか——

アナトール 起して呉れたまへ。——その酒を向うへやつといて呉れたまへ!。……僕は是が非でも今夜の事を聞くんだ。——アンニー——アンニー!

アンニー 今夜……あの人が私に言つたの——あの人は——私が——好き——だつて!

アナトール それでお前は——

アンニー 私さう言つたの——嬉しいわつて——それで私あの人に嘘をつくのは可厭だから——だから私貴方に、左様ならつて、言ふの——

アナトール その男に嘘を吐くのは可厭だから!!。——ぢや俺の爲にぢやないんだな——?。……

……その男の爲になんだな!?

アンニー え、それがどうしたの!。——私貴方が好きだつた事はない!

アナトール よろしい!。——難有い事に俺はもうそんなこと些とも氣にはならない……!

アンニー さう!?

アナトール 俺も愉快的境遇にゐるんだ——是から先お前から親切にされなくつても俺は困らない!。

アンニー さう……さう!。

アナトール さうだよ……さうだよ!。——もう長いこと俺はお前を愛してはゐなかつた!。……

……俺は外の女を愛してゐる!。

アンニー ははは……ははは……

アナトール もう長いこと!。——マクスに訊いて見るが可い!。——お前が来る前——俺はマクスにその話をしたんだ!

アンニー ……さう……さう……

アナトール もう長いこと!。……然も今度の女は千倍も良くつて千倍も綺麗で……

アンニー さう……さう……



アナトール ……その女の爲なら、俺は喜んでお前の様な女を千人でも投り出す——分つたかい  
—？。

アンニー (笑つてゐる) ……

アナトール 笑ふんぢやない！——マクスに聞いて見ろ——

アンニー でもあんまり滑稽だわ！——今になつてそんなことを本當にさせようたつて——

アナトール 本當の事だよ、お前に言つて置く——誓つても可い、本當だ！——もう長いこと

俺はお前を愛してはゐなかつた！……お前と一緒にゐても、俺はお前の事なぞ考へたことはな

かつた——お前をキスするときには、俺はお前を今度の女だと思つてゐたんだ！——今度の女だ

よ！——今度の女だよ！。

アンニー さうね——それぢや合ひ子ねえ！。

アナトール さうかい！——お前さう思ふかい？。

アンニー え——合ひ子だわ！。まつたく可かつたわね！。

アナトール さうかい？。——俺達は合ひ子ぢやない——どうしてどうして——決して合ひ子ぢ

やない！。——といふのは……お前の経験した事と……俺の経験した事とは……決して同じもの

ぢやないんだ！。……俺の話の方がよつほど……罪が深い……

アンニー ……なんですつて？。——(眞面目になりながら)

アナトール さうだよ……俺の話の方は少し譯が違ふ——

アンニー 貴方の方の話はどう違ふの——？。

アナトール さうさ——俺は——俺はお前を欺してゐたんだ——

アンニー (立上がる) なんですつて？。——なんですつて！。

アナトール 欺してゐたと言ふんだよ、お前を——お前相當に——毎日毎日——每晚每晚。——

お前に會ふ時には、俺はその女の所から來た——お前に分れてからは、俺はその女の所へ行つた

——

アンニー ……卑劣だわ……そりや……卑劣だわ!!。(外套掛けの傍へ行つて雨外套とボアとを

身體に投げかける)

アナトール お前達を相手にしてゐちや、いくら急いだつて急ぎ過ぎるとは言へない——さうし

なけりやお前達から先を越される!……さうだ、仕合せと俺は自分の夢を……

アンニー それで分つた!。——さうだ!!。

アナトール さうだ……分つたらうが?。今こそ分つたらうが!

アンニー 男つていふものは女よりどの位圖圖しいか知れないといふことが——



アナトール さうだ、それが分かつたらうが！——俺は圖圖しいんだよ……まつたく。  
 アンニー (ボアを頸にぐるぐる巻きする。帽子と手套とを手に持つて、アナトールの前に立つ  
 ——) さうよ……圖圖しいの！——是は……然し貴方に當てて言つた事ぢやないんですよ！。  
 (行きさうにする)

アナトール なんだつて!?。(女の後について行く)

マクス ほつときたまへ！——もう引きとめる譯には行かない！——

アナトール 「是を！」——俺に當てて言つたんぢやない？——なんだ!?。——お前が……?  
 お前が……その——

アンニー (扉口で) 決して貴方に當ててなんか言やしません……決して!……そんな圖圖し  
 いのは男だけですよ——

給仕 (アイスクリームを持つて来る)——おや——

アナトール クリームなんぞあつちへ持つて行け!

アンニー ……なあに!?。ワニラ・クリーム!!……いいわ!——

アナトール お前はまだ生意氣に!——

マクス ほつときたまへ!——クリームにもお別れをする必要があるんだから——永久に—

——!

アンニー さうよ!……喜んで!——ボルドーにも、シャンパンにも——牡蠣にも——それか  
 ら取分け貴方にも、アナトール——!。(不意に扉口を離れて、さもしい微笑を含んで、窓際の  
 小卓に載せた巻煙草の箱に近づき、煙草を一握りポケットの中へ詰める) 私が吸ふんぢやないの  
 よ!——あの手に持つて行つてやるのよ!。(去る)

アナトール (女の後を追うて扉口に立つてゐる……)

マクス (落ちついて) ね……どうだい……非常に樂に片づいたぢやないか!……

(幕下りる)



末期の苦しみ



## 人物

アナトール

マクス

エルゼ

アナトールの部屋。暮れがた。部屋の中は暫らく空っぽである、やがてしてアナトールとマクスとが這入つて来る。

マクス やあ……なんとか言ひながら到頭一緒に上がつて来ちまつた！。

アナトール 少し遊んで行きたまへ。

マクス 邪魔をしやしないか？。

アナトール お願ひだ、みて呉れたまへ……僕は一人で居たくない——第一あの女が来るか来ないかも分からない！。

マクス へえ！。



アナトール 十遍の内七遍までは待ちほけだ！

マクス そんなこと僕には堪へられないがね！

アナトール 然も大抵の場合厭でもその言譯を信じなくてはならない——また事實本當なことでももあるんだから。

マクス 七遍とも？

アナトール それはどうか分らない！……僕はさう思ふよ、結婚した女の男になつてゐる程不愉快なことはない！

マクス 然し君……例へばその女の亭主だつて僕はあんまりなりたいと思はない！

アナトール もうだいふ續いてゐる——どの位になるかな——？。二年——それどころぢやない！——もつと長い！——謝肉祭の時丁度二年だつた——だから「我等の戀の春」はもう三度目になる……

マクス 君はどうしようと言ふんだ！

アナトール (外套を著洋杖を持つたまま、窓の傍の肘掛椅子にぐたりとかかる。)——ああ、僕疲れた、——僕は苛苛してゐる、何がしたいのか自分にも分らない……

マクス 旅行したまへ……

アナトール どうして？

マクス 早く片をつける爲に！

アナトール そりやどういふ事なんだ——片をつけるといふのは？！

マクス 是まで僕は幾度も君がそんな風になつてゐるのを見たことがある——君は覺えてゐるだらう、つい此間も君は、全然苦しむ價值もない様な下らない女と別れようか別れまいかといつて、長い間愚圖愚圖してゐた。

アナトール 君は、僕がもうあの女を愛してはゐないのだ、と思つてゐるのか……？

マクス どうしてどうして！。さうだと寔に始末が可い……其所まで來れば誰も苦しい思ひをしやしないから！。ところが今君は死よりもつと不愉快な——死にさうな心持を營めてゐる。

アナトール 君は人に厭がらせを言ふ癖を持つてゐる！。——然し君の言ふ通りだ——まつたく末期の苦しみだ！

マクス 口に出して言つて見たまへ、少しは氣が晴れるから。然もそれをするのに哲學なんぞを持つて來る必要はない！。——大きな「普遍」の中へ這入つて行かなくても、——「特殊」をうんと深く掘つて行つて一番奥にある芽を捕まへりやそれでもう譯山なのだ。

アナトール 君の言ふ事は別に大した事でもないぢやないか。



マクス 僕は唯さう思ふといふ丈なんだ。——然し僕は君のその心持をひる中からずつと見てゐた、あすこのブライテルに居た時から、君はあすこにゐるとき蒼い此上もなく退屈さうな顔をしてゐた。

アナトール あの女は今日あすこへ來ると言つてゐたんだ。

マクス 然も君は、あの女の馬車に會はなかつた事を、喜んで居たぢやないか。是は君が、二年前あの女を迎へた例の微笑を、もう用ひなくても済むと思つたからなんだ。

アナトール (立上がる) 一體どうしてかうなつたんだらう!。——ねえ君、一體どうしてかうなつたんだらう——?。——また例のあれが近寄つて來たのだらうか——あのなし崩しに、じりじりと寄せる、名狀しやうのない悲しい、<sup>フェル</sup>焰の衰滅か?。——それを僕がどんなに恐れてゐるか、君には推量も出來まい——!。

マクス だから言つてるぢやないか、旅行したまへ!。——でなければ、勇氣を出して、あの女にすつかり本當の事を打ち明けたまへ。

アナトール 何を?。どういつて?。

マクス さ、あつさり、お仕舞だつて。

アナトール さういふ種類の本當の事が、それほど效能のあるものだとは、僕には思へない。何

しろさういふのは疲れ切つた嘘つきの言ふ残酷な正直に過ぎないんだからな。

マクス 無論さ!。君等は思ひ切つて一遍に別れて了ふよりは、ありとある小細工をして、お互ひ同士が元の様な心持であるのではない事を隠し合はうとしてゐるのだ。どうして又そんな事を?。——

アナトール 言つたところでお互に信じないからだ。それに末期の苦しみが果しもなく續く悲涼の中にも、折折は不思議な、人を誑<sup>おそ</sup>らかす様な、ぱつとした匂<sup>にお</sup>やかな瞬間が現はれて、凡てのものが今までとは比較にならない程美しく見える事があるからだ……!。戀が終に近づいてゐる時ほど、我我は幸福への強い憧憬を感じることはない……だから、何かの氣まぐれでも、酔つたはずみでも、或は極極下らない事でも、なんでもいい、それが幸福らしい粧ひをしてやつて來さへすれば、僕等はその假面の奥にどんなものがあるかなどといふ事は少しも問題にしないのだ。……それから、凡ての甘い心持はなくなつて了つたと思ふ事を自ら羞ぢる瞬間が來る事がある——すると言葉には出さずに、色色と手を盡して、お互に償ひをつけようとする。——心持が死に絶えて行く事を慮れて、丸でぐたぐたに疲れて了ふ——すると不意に又生命<sup>いのち</sup>が現はれて來る——前よりは一層熱い、前よりは一層熾<sup>さか</sup>んな——前よりは一層人を誑<sup>おそ</sup>らかす様な!。——

マクス 是丈の事は忘れない様にしたまへ、さういふ終は、こつちで氣がつくよりもつと早



く始まつてゐるものだ！——最初のキスと同時に既に死にかける幸福も可なりある。——君は、息を引取る瞬間までも自分を健康だと思つてゐる、大病人の話を聞いたことはないか——？。

アナトール 僕はさういふ種類の幸福な者の中には這入つてゐない！——それには論がない！——是までのところ僕はどうも戀の憂鬱病者ヒュトコンダであるらしい……ことによると僕の感情は、僕が信じてゐる程に、病的でもなんでもないのであるかも知れない、——もしさうだとすればそれは餘計堪らない！。——「呪ひの眼」の傳説がある、あれが僕にとつては眞實なのではないかとよく思ふ事がある。唯僕の「呪ひの眼」は内へ向いてゐる、従つて僕の最も好い感情もその眼に會つてみんな斃れて了ふ。

マクス それならそれでその「呪ひの眼」に誇るべきこともある筈だ。

アナトール ところがなんにもない、僕にはほんとに外の人達が羨ましいんだ！。——ねえ君——その人にとつては人生の一步一步が新らしい勝利だといふ様な、さういふ幸福な人が！。——僕は絶えず何か片づけようとしてゐなければならぬ、僕は足溜りを拵へる——僕は熟考する、僕は休息する、僕は又足を引摺り引摺りあるいて行く——！。外の人達は遊び半分で征服する、内的經驗に關することでも……彼等にとつて何もかもがおんなしなんだ。

マクス アナトール、彼等を羨むには當らない——彼等は征服しやしない、ただ通り抜けるの

だ！。

アナトール それでも幸福でないと云へるか——？。——彼等は少くともこの不可思議な罪の意識を持たずに済む、もつとも是は僕等の別れの苦しみの神祕ではあるけれども。

マクス 罪つて、どんな？。——

アナトール 僕等は、女に向つて誓つた「永遠」といふことを、僕等が女を愛してゐた一二年のうち若しくは一二時間のうちに嵌め込む、義務を持つてはゐないだらうか？。——ところが僕等は嘗て一度もそれが出来なかつた！嘗て一度も！。——この罪の意識を持つて僕等はあらゆる女と別れる——さうして僕等の憂鬱は實は無言の懺悔に外ならない。是こそ僕等の最後の誠實なんだ！。——

マクス どうかするとそれは又僕等の最初の……

アナトール 然もさういふ凡ての事は随分寂しい。——

マクス ねえ君、君にはかういふ長く續く關係といふものがいけないのだよ……君は鋭敏すぎる鼻を持つてゐる——

アナトール といふのは？。

マクス 君の「今」はいつも消化され切つてゐない「過去」の重荷をすつかり脊負つてゐるい



てゐる。……君の戀の春が又腐り出してゐるんだ、といつて君の魂はそれを全然突き倒して了ふだけの目覺ましい力を持つてゐない。——すると、その當然の歸結はどうなる——？。——君の「今」の最も健全な最も匂やかな時の廻りをさへ、此微の臭が取巻いて——君の「今」の空氣は手のつけやうもない様に毒せられる。

アナトール さうかも知れない。

ア マクス だから「嘗て」と「今」と「この後」とのこの纏れ合ひは君の中で永久に果てしがつかない、君の心にあるのは斷えざる渾沌とした途中なのだ！。「嘗てあつたもの」は君にとつて決して君がそれを經驗した折の情調から離れて了つた、單純な凝まりついた事實ではない——反つてその情調はいつまでもその上に重苦しく膠りついてゐる。従つてそれは色が次第に薄れ次第に萎へて——さうして死んで行くに過ぎない。

アナトール その通りだ。さうしてこの露の様なものの中から、僕の最も大事な瞬間の上によくその陰を落す、不快な匂ひが出て來るのだ。——その匂ひから僕はどうかして逃がりたい。

マクス 實に妙な話だが、人はどうかすると極極幼稚なことを言はずにはゐられないことがある！。……今僕にはさういふ種類の言葉が口の先まで出かかつてゐる。強くなりたまへ、アナトール——健全になりたまへ！。

アナトール 君はさう言ひながら、自分で笑つてゐるぢやないか！。……僕にその力量があるといふことは、考へられないことぢやない！。——然し僕にはもつと大事なものが缺けてゐるんだ——要求が！。——僕はさう感じてゐる、若し僕が「強く」なつたとしたら、僕はどんなに澤山のものを失はなければならないだらう！。……病氣は非常に澤山ある、然し健康はたつた一つしかない——！。……健康であれば、否でも應でも人は必ず外の人と全然同じものになる——然し病氣は人によつてみんな違ひ得る！。

マクス そりや君たゞの見えぢやないか？。

アナトール 見えたとしたら？。——君、見えは一種の病氣だといふ事は、君もちやんと知つてゐる筈ぢやないのか——？。

マクス 君の口占だと、要するに君は旅行したくないんだね。

アナトール ことによるとするかも知れない——よろしい、しても可い！。然し僕は自分で自分に不意打を喰はせるのでなけりや——計畫なんぞ立てるのは眞つ平だ——計畫は凡てのものを打ち毀すものなんだから！。まつたく堪らないぢやないか——鞆を詰めたり、馬車を呼んで來させたり、停車場へ——など、言はなけりやならなかつたり！。

マクス そんなことはすつかり僕がしてやるよ。へアナトールが慌ただしく窓の所へ行つて、



外を見たので——どうしたんだ？——

アナトール なんでもない……

マクス ……なあんだ……すっかり忘れてゐた。僕はもう歸る。

アナトール ……おえ君——今になつて僕はまた——

マクス ——？

アナトール あの女を心底しんせきから愛してゐるのだといふ氣がする！

マクス それは君極めて簡単に説明が出来ると、實際君は、本當にあの女を心底から愛してゐるのだ——此瞬間には！

アナトール ぢや、左様なら——馬車はまだ頼まない様に。

マクス あんまり強情を張るもんぢやないよ！——トリエスト行きトリエストの急行には四時間ある——

！荷物は後から送れば可い——

アナトール どうも難有う！

マクス (扉口で)僕はどうしても警句を吐かずぢや出かけられない！

アナトール どうぞ？

マクス 女は謎である！

アナトール なあんだ！

マクス 仕舞ひまで聴いてゐるんだ！——女は謎である——と人は言ふ！。然し女にとつて

我我男はどんな謎だらう、若し女が我我に就いて考へ得る丈けの頭を持つてゐたら？

アナトール 旨い、旨い！

マクス (辭儀をして去る……)

アナトール (暫く獨りで部屋の中をあるき廻る、それから窓際にかけて巻煙草を吸ふ。ワイオリンの音が二階から響いて来る——間——廊下に足音がする……アナトール耳をそば立てて、立上る、煙草を灰皿の中に置いて、今しも這入つて来る深く顔を包んだエルゼを目がけて慌ただしく寄つて行く)

アナトール やつと！——

エルゼ もう遅いのね……ねえ、ねえ！。(女は帽子とヴェールをとる)——早くは來られなかつたんですもの——とても！——

アナトール 知らせて呉れる譯には行かないものかなあ？——待つてゐるとほんとにじりじりする！——が——みられる——？

エルゼ ね、あなた、長くはみられないのよ、——主人が——



アナトール (不興氣に向うをむく)

エルゼ あら——また始まつた!。——だつて私のせむぢやないぢやありませんか!

アナトール そりやね、——あなたの言ふ通りだ!。——どうすることも出来ないことなんだから——こつちで馴れるより仕方がない。……さ、いらつしやい——此方へ!。……(二人窓際へ寄る)

エルゼ 見えるかも知れない!。——

アナトール もう暗いぢやありませんか——それに此窓掛けで私達は蔭になつてゐる!。然しいやだなあ、長くゐられないなんて!。——あなたにはもう二日も會はない!。——然かも此間會つた時はたつた二三分だつた!

エルゼ あなたは私を愛して呉れてゐる——?。

アナトール なんだ、ちやんと知つてゐる癖に——あなたは凡てです、私にとつて凡てです!。……いつまでもいつまでもあなたと一緒にゐたいといふのが——

エルゼ 私もあなたの傍が大好きなの!。——

アナトール 入らつしやい…… (女を肘掛椅子の上に自分の傍へ引ばる)——手を貸して!。

(手に肩をつける)あの上でお爺さんの弾いてゐるのが聞こえる?。——好い——でせう?。

エルゼ あなた!

アナトール ああほんとに——かうしてあなたと一緒にコモの湖か……ゼニスにでも——

エルゼ ゼニスには私新婚旅行の時行つてよ——

アナトール (不快を押さへつけて)今そんな事を言ふ必要があるんですか?。

エルゼ でも、私はあなたつきり愛してゐやしないの!。是迄あなたつきり愛しはしなかつたの!。外の人は誰も——私の主人でさへ——

アナトール (手を合はせて)お願いです!。——せめて一秒でも可いから自分を結婚してゐないと思つて下さい!。此刹那の美しい味を齧つて下さい——私達二人は唯二人つきりで此世の中にゐるのだと考へて下さい。……(鐘の音)

エルゼ 幾時——?

アナトール エルゼ、エルゼ——訊いちやいけない!。外の人間がゐるといふことを忘れておしまひなさい——あなたは私の傍にゐるのぢやありませんか!

エルゼ (優しく)あなたのためにこんなに忘れてゐるぢやありませんか?。——

アナトール 可愛い——(女の手をキスしながら)——

エルゼ ねえアナトール——



アナトール (軟く) 又、どうしたつて言ふんです、エルゼ——?

エルゼ (微笑しながら手を動かして歸らなけりやならないと言ふ)

アナトール ぢやあなたは?

エルゼ 歸らなくつちやなりませんわ!

アナトール ならない?

エルゼ ええ。

アナトール ならない——?。今——今——?。——ぢやいらつしやい!。(女から離れる)

エルゼ あなたとは話も何も出来やしない——

アナトール ええ、私とは話も何にも出来ませんよ!。(部屋の中を歩行き廻はる)——かういふ

生活は必ず私を氣違にしてさふ、などといふことにはあなたは氣がつかない?。——

エルゼ それが私の頂くお禮なのね!

アナトール お禮、お禮!。——なんのお禮です?。——あなたから頂いた丈のものを私はあなたに差し上げなかつたでせうか?。——あなたの愛し方にくらべて私の愛し方が足りないんですか?。——あなたが私を幸福にして下さるにくらべて私があなたを幸福にしてあげる程度が足りないんですか?。——戀——狂氣——苦痛——!。然し恩に著る?。そんな愚な言葉は何所から

出て来るんです?。——

エルゼ ぢや丸つきり——些しのお禮も頂く譯はないのね?。——あなたのために何も彼も犠牲にしてつた私が?。

アナトール 犠牲にした?。——私は犠牲なんぞ要求した事はない——若しそれが犠牲だつたのなら、結局あなたは私を愛しはしなかつたんです。

エルゼ そんなことまで?。……私が愛してゐない——その人のためには自分の所天を騙して

ある私が——私が、私が——愛してゐない!

アナトール 其所まで私は言やしなかつた!

エルゼ ああ、私は何をしたんでせう!

アナトール (女の前に立ち止まつて) ああ、私は何をしたんでせう!。——この立派なお言葉が丁度缺けてゐた所なんです!。——あなたは何をしたんでせう?。私が言つて聞かせます……あなたは七年前は世間知らずの未通女だつたんです——それからあなたは結婚した、とにかく結婚はしなけりやならないものなんだから。——あなたは新婚旅行をした……あなたは幸福だつた……エニスで——

エルゼ 決して!。——



アナトール 幸福だった——ゼニスで——コモの湖で——なんといつたつて愛があつたには違ひない——ある瞬間には、少くとも。

エルゼ 決して！。

アナトール ええ？。あの男はあなたにキスしなかつたんですか？——抱き締めなかつたんですか？。——あなたはあの男の女房ぢやなかつたんですか？。——それからあなたは歸つて来た——それからあなたは退屈し出した——當り前のことです——貴女は綺麗で——様子がよくつて——その上に妻君なんだから——！。さうしてあの男は要するに馬鹿なんだから！。——それからコケットリーの幾年かが續いた：唯のコケットリー丈だつたといふ事にして置きます！。

——私の前には誰も愛したことはない、あなたが言つてゐるんだから。もつともその證據を上げる譯には行かない——然し私はそれを信じて置く、その反對は私にとつて不愉快なんだから。

エルゼ アナトール！。コケットリー！。私が！。——

アナトール さうです：コケットリーです！。コケットリーとは何ぞや？。色好みで同時に嘘つきであるといふことです！。

エルゼ 私がさうだつたんですつて？。——

アナトール ええ……あなたが……！。それから戦の幾年かが續いた——あなたは動搖した！。

自分はそのロマンスを経験する事は許されないのであらうか？といふ事だ。——あなたは段々綺麗になつて行つた——あなたの所天は段々退屈に、段々馬鹿に、段々醜くなつて行つた……！。最後に、来るべきものが来た——さうしてあなたは男を拵へた。その男が偶然私だつたんです！。

エルゼ 偶然……貴方！。

アナトール ええ、偶然私だつたんです——若し私がゐなかつたら——外のものが丁度此通りになつてゐたに違ひないんだから！。——あなたは自分の結婚生活を不幸だと思ひ出した、若しくは豫期した程に幸福でないと思ひ出した——あなたは愛して貰ひたくなつた。あなたは私と一緒に些し計り遊んで見た、偉大な情熱の夢を見た——それからある日、あなたのお友達の誰かが馬車に乗つてあなたのそばを通り抜ける所を見かけるか、それとも隣のボックスに来てゐる浮氣者を見てあなたはしみじみ考へ込んだ、私だつて自分の楽しみをして悪いと云ふ法はない！。——それだからあなたは私の女になつたんです！。——是があなたのことです！。——是が凡てなんです——こんな小さな冒険に對してあなたがなぜそんな大袈裟な言葉を使ふのだから、私には分らない。

エルゼ アナトール——アナトール！。——冒險！。——

アナトール さうです！。



エルゼ あなたの言つたことを取消して下さい——是が非でも取消して頂きます！。

アナトール 何を取消することがあるんです——間違つてゐるとでも言ふんですか——？。

エルゼ それを貴方は本當に信じていらつしやるんですか——？。

アナトール ゐますとも！。

エルゼ さう——ぢや参ります！。

アナトール いらつしやい——私は引きとめはしない！。

(間)

エルゼ あなたは私を追ひ出すの？。——

アナトール 私が——あなたを追ひ出すの？。——二分前にあなたこそ言つたんぢやありませんか「参ります！」つて。

エルゼ アナトール——私行なくなつちやならないんです——あなたは分つて下さらないんですか——

アナトール (きつぱりと) エルゼ！。

エルゼ なあに？。

アナトール エルゼ——お前は私を愛してゐる——？。ゐるなら言つて呉れ——

エルゼ 言ふわ——誓つて——でもあなたは一體どんな證據を見せろと仰しやるの——？。

アナトール それが聞きたい——？。まあ可い！。——そのうち私に信じられる様にもなるだらう、お前が私を愛してゐるといふことが……

エルゼ そのうち？。——それをあなたは今日仰しやるの！。

アナトール お前は私を愛してゐる——？。……

エルゼ 私はあなたを拜んでゐるわ——

アナトール ぢや——私のところにあるが可い！。

エルゼ なんですつて？。——

アナトール 一緒に逃げよう——可い？。——一緒に——外の町に——外の世界に——私はお前と二人つきりでゐたい！。

エルゼ あなた何を思ひ出したの——？。

アナトール 何を私が「思ひ出した」——？。たつた一つの自然なことだ——さうだ！。——どうして私がお前を手離して遣れるものか——あの男の所へ——今迄どうしてそれが出来てゐたんだらう？。——「まつたくだ——お前は又どうしてそれをする勇氣を持つてゐたんだらう——お前が！私を「拜んでゐる」と云ふお前が！。——どうして？。私の腕から離れ、私のキスで焚き焦

エルゼ 言ふわ——誓つて——でもあなたは一體どんな證據を見せろと仰しやるの——？。

アナトール それが聞きたい——？。まあ可い！。——そのうち私に信じられる様にもなるだらう、お前が私を愛してゐるといふことが……

エルゼ そのうち？。——それをあなたは今日仰しやるの！。

アナトール お前は私を愛してゐる——？。……

エルゼ 私はあなたを拜んでゐるわ——

アナトール ぢや——私のところにあるが可い！。

エルゼ なんですつて？。——

アナトール 一緒に逃げよう——可い？。——一緒に——外の町に——外の世界に——私はお前と二人つきりでゐたい！。

エルゼ あなた何を思ひ出したの——？。

アナトール 何を私が「思ひ出した」——？。たつた一つの自然なことだ——さうだ！。——どうして私がお前を手離して遣れるものか——あの男の所へ——今迄どうしてそれが出来てゐたんだらう？。——「まつたくだ——お前は又どうしてそれをする勇氣を持つてゐたんだらう——お前が！私を「拜んでゐる」と云ふお前が！。——どうして？。私の腕から離れ、私のキスで焚き焦



されて、お前は、お前が私のものになつて以来はお前には丸で他人のうちも同然になつてゐるあの家へ歸つて行く？。——いや——いや——今迄こそ已むを得ない事と諦めてゐたが——私達はそれがどんなに怖ろしい事であるかといふことを考へずにはゐたんだ！。かういふ風にして續けて生きて行く事はもう到底出来ない——エルゼ、エルゼ、一緒に出で！。——さ……黙つてゐるね——エルゼ！。——シシリへ……何所でもお前の好きな所へ——海を越えても可い——エルゼ！。

エルゼ　——何を言つてらつしやるのよ？。

アナトール　お前と俺との間に誰れも立つものはなくなる——海を越えて、エルゼ！。——俺達は二人つきりになるんだ——

エルゼ　海を越えて——？。

アナトール　何所でもお前の好きな所へ！。……

エルゼ　そりやあ……ねえ……

アナトール　お前は考へるのか——？。

エルゼ　ね、あなた——一體なんのためにそんなことをする必要があるんです——？。

アナトール　何を？

エルゼ　逃げちまふといふこと——そんなこと丸で必要がないぢやありませんか。……私達は此維也納にゐたつても會ひたいと思ふ度に大抵は會つてゐられるぢやありませんか——

アナトール　思ふ度に、大抵は。——さうだ……さうだ……私達は……そんなこと丸で必要がない……

エルゼ　そんなこと夢物語りだわ……

アナトール　……さうだ、その通りだ……(間)

エルゼ　怒つて——？。(鐘の音)

アナトール　行かなくちやならないんだらう！。

エルゼ　……あら——こんなに遅くなつちやつた……！。

アナトール　さ——ぢや行くが可い……

エルゼ　明日また——六時には私此所に來てゐるわ！。

アナトール　……どうでも……

エルゼ　キスして呉れない——？。

アナトール　してあげるとも……

エルゼ　私この埋め合せは屹度するわ……明日！。——

エルゼ　逃げちまふといふこと——そんなこと丸で必要がないぢやありませんか。……私達は

此維也納にゐたつても會ひたいと思ふ度に大抵は會つてゐられるぢやありませんか——

アナトール　思ふ度に、大抵は。——さうだ……さうだ……私達は……そんなこと丸で必要がな

い……

エルゼ　そんなこと夢物語りだわ……

アナトール　……さうだ、その通りだ……(間)

エルゼ　怒つて——？。(鐘の音)

アナトール　行かなくちやならないんだらう！。

エルゼ　……あら——こんなに遅くなつちやつた……！。

アナトール　さ——ぢや行くが可い……

エルゼ　明日また——六時には私此所に來てゐるわ！。

アナトール　……どうでも……

エルゼ　キスして呉れない——？。

アナトール　してあげるとも……

エルゼ　私この埋め合せは屹度するわ……明日！。——



アナトール　——（扉口<sup>かどぐち</sup>まで女を送つて行く）左様なら！  
エルゼ　（扉口で）もう一度キスを！  
アナトール　可いとも——さ！。（女にキスする、女去る）  
アナトール　（部屋へ歸つて来る）俺は此キスであの女をあの女相當のものにしてしまった……  
頭<sup>あたま</sup>敷<sup>まかす</sup>を一つ殖<sup>は</sup>やすもの<sup>に</sup>！。（身<sup>からだ</sup>體<sup>だ</sup>を揺<sup>ゆ</sup>する）馬鹿、馬鹿……！

結　婚　式　の　朝



## 人物

アナトール  
マクス  
イローナ  
フランツ 召使ひ

趣味豊かにしつらつた獨り住みの部屋、右手の扉は支關へ續く、帷が片寄せて垂れてある。左手の扉は寢室へ。

アナトール (朝衣の装で爪先立てて左手の部屋から出て来て、そつと扉を締める。長椅子にかけて扣鈕を押へる、呼鈴が鳴る)

フランツ (右手から現はれて、アナトールに気がつかず、左手の扉の方へと行く)

アナトール (初めは気がつかない、気がついて後を追っかけ、扉をあけさうにしてゐるのを止める) なんだい、そんなにこつそりあるいて?。來たのだつて分かりやしないぢやないか!



フランツ 何か御用でございますか？

アナトール サモヴール！

フランツ 畏りました。(去る)

アナトール そつと、馬鹿！もつとそつとはあるけないのか。(爪先立てて左手の扉口へ行き、扉を少しあける) 眠てゐる！……いつまでも眠る女だな！。(扉を締める)

フランツ (サモヴールを持つて来る) 旦那、お茶碗は二つで？

アナトール さうだ！。(呼鈴が鳴る)……行つて見ろ！。こんなに早く誰が来たんだらう？

(フランツ去る)

アナトール 俺は今日は全然結婚式を擧げる気分になれない。斷る譯に行かないかな。

フランツ (右手の扉をあける、マクス這入つて来る)

マクス (親しげに) やあ！

アナトール しつ……静かに！……フランツ茶碗をもう一つ！

マクス もう二つあるぢやないか！

アナトール フランツ、茶碗をもう一つ——あつちへ行け。(フランツ去る) さう……それで、

君、何が君を朝八時に僕の所へ來させたんだい？

マクス 十時だよ！

アナトール それぢや、何が君を朝の十時に僕の所へ來させたんだい？

マクス 僕の健忘性が。

アナトール もつと小聲で……

マクス 一體どうしたつていふんだい？。君は過敏になつてゐるのか？

アナトール あゝ、ひどく！

マクス でも今日君が過敏になつてゐちやいけないぢやないか？

アナトール で、なんの用があるんだい？

マクス だつて今日僕は君の結婚式の介添なんぢやないか、君の綺麗な従妹のアルマが僕の「夫人」なんぢやないか！

アナトール (氣乗りがせず) 用を言ひたまへ。

マクス それで——僕は花束を誂らへて置くことを忘れたんだ、然かもアルマさんがどんな衣装を着るんだか、此際になつて僕に分かつてゐない。どうだらう、白だらうか紅だらうか、藍だらうか、それとも緑だらうか？

アナトール (不機嫌さうに) 緑なもんか！



マクス どうして緑なもんかだい？  
 アナトール 従妹は今迄綠色なんか著た事はない。  
 マクス (激して) それを僕が知る筈がないぢやないか！  
 アナトール (前の様に) そんな大きな聲をするんぢやない！。静かに言つたつて相談は出来るよ。

マクス ぢや君は、あのひとが今日どんな色のものを著るんだか、知らないんだね？  
 アナトール 紅か藍か何方かだよ！。  
 マクス 何方かつて、そりや丸で違ふぢやないか。  
 アナトール なんだ、紅だつて藍だつておんなしこつたよ！。  
 マクス ところが僕の花束にとつては、おんなしこつたぢや済まされない！。  
 アナトール 二つ誂へるさ、一つは君が扣鈕の穴に挿しとけば可い。  
 マクス 僕は君の下らない洒落を聞きに来たんぢやないよ。  
 アナトール 僕は今日の二時にもつと下らない洒落をやるんだ！。  
 マクス 君は君の結婚式の朝に可なり良く興奮してゐるね。  
 アナトール 僕は過敏になつてゐる！。

マクス 君は僕に何か隠してゐる。

アナトール なんにも！。

イローナの聲 (寢室から) アナトール！。

マクス (喫驚してアナトールの顔を見る)

アナトール ちよつと失敬。(寢室の扉の所へ行き、暫くその奥へ消える。マクス眼を睜いてそれを見送る。アナトール扉口で、マクスに見えない様にして、イローナにキスし、扉を締めて又マクスの所へ歸つて来る)

マクス (憤慨して) さういふことは許されない！。

アナトール マクス、まあ聞いて呉れ、そのあとで宣告して呉れ。

マクス 僕は女の聲を聞いた、さうして宣告する。君はもういまから君の妻君を欺し始めてゐる！。

アナトール 掛けたまへ、さうして僕の言ふことを聞いて呉れたまへ、君はすぐ違つたことを言ふ様になる。

マクス どうして、どうして。僕は元より君子を氣取りはしない、然しかういふことは……！。

アナトール 君は僕の言ふことを聴いては呉れないのか！。



マクス 言ふが可い！。然し急いでくれたまへ、僕は君の結婚式に招かれてゐる。（二人とも腰を下ろす）

アナトール （悲しげに）あゝ、さうだ！。

マクス （待ち遠しがつて）それで。

アナトール それで……それで、ゆうべは僕の未来の舅の家で碎斐式のおよばれがあつた。

マクス 知つてゐる、よばれたんだから！。

アナトール さうさう、君も来てゐた。とにかく随分大勢のお客さんが来てゐた！。みんなひどく上機嫌になつて、シャンパンを飲んだり、健康を祝したり……

マクス 僕も……君の幸福のために！。

アナトール さうだ、君も……僕の幸福のために……。（マクスの手を握る）難有う。

マクス 君はもう昨日さう言つたよ。

アナトール からしてみんな夜半迄大さう燥いでゐた……

マクス 知つてゐる。

アナトール 一瞬間僕も自分が幸福である様な気がした。

マクス シャンパンの四杯目を飲んでから。

結 婚 式 の 朝

アナトール （悲しげに）いや——やつと六杯目を飲んでから……なんだか悲しいんだ、さうして僕にはそれがなぜだか分からないんだ。

マクス その事は二人で飽きるほど話したぢやないか。

アナトール あの若い男もあすこに來てゐた、あの男が僕の花嫁の初戀だつたといふことを僕はちやんと知つてゐる。

マクス ああ、あの若いラルメンだね。

アナトール さうだ——さういふ風な詩人の一種なんだね。大勢の女から初戀的にはされるが、然しどんな女からも最後の戀的にはされない、さういふ運命を持つて生れて來たやうな人間の中の一人なんだ。

マクス 要件を片づけてもらつた方が僕には都合だがな。

アナトール その男は僕にはまつたく問題にならなかつた、要するに僕はその男に對してにやにや笑つてゐたんだ。……夜半になつてお客は散り散りになつた。僕はキスをして僕の花嫁に別れを告げた。花嫁も僕にキスした……冷たく。……階子段を下りて行くうち、僕は惡寒を感じた。

マクス おやおや……

アナトール 門の所で誰かれがまた僕にお目出度うを言つた。伯父のエツアルドは酔つ拂つて僕



を抱き締めた。ある法學士は學生歌を唄つた。初戀は、例の詩人は、襟を立てて小路へ消えた。或者は僕に弄戲つた。僕は屹度戀人の窓の下を歩いて夜を明かすに違ひないつて。僕は嘲るやうに微笑した。……雪がちらちら降り出した。人人は段段に散らばつた……僕は一人ぼつちで立つてゐた……

マクス (氣の毒さうに) ふむ……

アナトール (より熱心に) さうだ、往來に一人ぼつちで立つてゐた——寒い冬の夜、雪が大き  
な片になつて僕の廻りに入り亂れてゐるのに。何となく……ぞつとする様な心持だつた。

マクス 頼むよ、君——何所へ行つたんだか、可い加減に言つてくれたまへ。

アナトール 大仰に) 僕は行かなければならなかつたんだ————假裝舞踏會に！。

マクス へえ！。

アナトール 君は驚ろくのか、え——？。

マクス そのあとの事は僕には分かる。

アナトール ま、さう言はないでくれたまへ、君——寒い冬の夜僕がさういふ風にして立つてゐた時——

マクス 悪寒を感じながら……！。

アナトール 凍えながら！。その時猛烈な苦痛が僕を襲つた、是からは僕ももう自由な人間ではなくなる。僕は是でもう永久にスキートな檢束のない一人者の生活に別れを告げなければならぬい！。僕は自分に言つた。今夜こそ、何所へ行つたなどと訊かれずに家に歸ることの出来る、最後の晩なのだ。自由と冒険と……恐らくはまた戀の最後の晩なのだ！。

マクス おやおや！。——

アナトール からして僕は喧囂のまつ唯中に立つた。僕の廻りには絹の著物や繻子の著物の衣が  
結 婚 娘が聞えた、眼が燃えた、假面が會釋をした、白く輝く肩が匂ほつた——謝肉祭全體が息をし狂  
式 ひ廻つた。僕はこの動亂の中に跳り込んで、それを僕の心の廻りに暴れ廻らせた。僕はそれを吸  
ひ込まなげりやゐられなかつたのだ、その中に浸つて了はなげりやゐられなかつたのだ！。……

朝 マクス 要件を……時間が無い。

アナトール 僕はさういふ風にして大勢の中を奥へ奥へと押し遣られる、僕は既に酒を飲んで僕  
の頭を酔はせてゐる、今度は僕の廻りに波を打つあらゆる香水の匂ひが僕の呼吸を酔はせる。そ  
れは未だ會てなかつた様な勢ひで僕をめぐり流れて来て来た。僕の爲に、さうだ僕の爲に、謝  
肉祭が自ら別れの祭をして呉れたのだ。

171  
マクス 僕は君の第三番目の酔を待つてゐる……



アナトール それは来た……心情の酔ひが……!

マクス 官能の!。

アナトール 心情の……!。まあいい、官能のでも。君はカタリーネを覚えてゐるか……?。

マクス (聲高く) らん、カタリーネなら……

アナトール シッ……

マクス (寢室の扉をさして) なんだ……あの女がさうなのか?。

アナトール いいや——あれは丸で違ふ。然しあの女も彼所に来てゐたのだ——それから綺麗なブリュネットの妻君も、然しこの名前は言はずに置く——それからテオドルの女の小さなブロンドのリッツイー——もつともテオドルは来てゐなかつた——それから誰、それから誰。僕は假面をかぶつてゐてもみんなが分かつた——聲で、あるきつぶり、身動きの端端で。然し不思議なことに……たつた一人どうしてもわからない女がゐた。僕はその女の跡をつけて歩いた、若しくはその女が僕の跡を。姿にはたしかに見覚えがある。さうして僕等は何所へ行つても始終必ずぶつかつた。噴水の所で、ブユフェーの所で、舞臺際のボックスの所で、始終!。最後にその女は僕の腕を捕まへた、その時僕は女が誰だかといふことが分かつたのだ!。(寢室の扉を指しながら立上る) あの女さ。

マクス お馴染み?。

アナトール 馬鹿だね、分からないのか?。六週前僕が結婚の約束をした時、あの女に言つたことを、君は知つてゐるぢやないか……お極りの出鱈目を。俺は旅行する。が、すぐ歸つて来る、俺はいつまでもお前を愛してゐる。

マクス イローナ……!?

アナトール シッ……

マクス イローナぢやない……?。

アナトール イローナだよ——だからどうか静かに!。歸つて来たのね、とあの女が僕の耳に囁いた。うむ、と僕は早速答へた。いつ歸つた?。——今夜。どうして前もつて手紙を下さらなかつた?。——郵便局がないから。——一體何所なの?。——偏鄙な小さな村。——で、いまは……?。嬉しい、歸つて来て、お前に誠實を立てて。——私もよ——私もよ。——大歡喜、シャンパン、それから又大歡喜。——

マクス それから又シャンパン。

アナトール いや——シャンパンはそれつきりだつた。——ああ、それから馬車で家へ一緒に歸つて来たんだが……先のようにね。女は僕の胸に凭りかかつてゐた。もう決して二度と離れま



いね——と女が言つた……

マクス (立上る) おい君、目を覺まして、もうお仕舞ひだといふことに氣がつきたまへ。  
アナトール 「決して二度と離れない」———— (立上がりながら) 然かも今日二時に僕は結婚するのだ!

マクス 外の女と。

アナトール まあ可い。結婚は必ず外の女とするものなんだから。

マクス (時計を見て) もう君時刻はぎりぎりだよ。(アナトールにイローナを何所かへやつて了へと云ふ心持を現はす動作)

アナトール あゝ、あゝ、見て来るよ、あの女の仕度が出来てるかどうか。(扉の所へ行つて、その前に立ち、マクスの方を向き) まつたく悲しいことだとは思はないか?。

マクス 不道徳なことだよ。

アナトール そりやさうだ、然し同時に悲しいことだ。

マクス とにかく行きたまへ。

アナトール (次の部屋の扉口へ)

イローナ (首を出す、瀟洒なドミノにくるまつて出て来る) なんだマクスぢやないの!。

マクス (腰を屈めて) なんだのマクス!

イローナ (アナトールに) 然かも私にはなんとも言ひもしないで。——私餘所の方だとばかり思つてたんだわ、知つてりやとつくに出て来てたのに。マクスいかが?。貴方この横著者をどう思ふの?。

マクス さうだ、この男は横著者だよ。

イローナ 六週間といふもの私この人のために泣いてたのよ。……この人は……貴方一體何所へ行つてゐたの?。

アナトール (手を大きく動かして) あつちの方——

イローナ 貴方にも手紙を上げなかつたの?。でももうかうしてゐるから。(彼の腕をとつて) ……もう旅行もなし……別れもなし。キスして頂戴!

アナトール でも……

イローナ あら、マクスはなんでもないぢやないの。(アナトールにキスする) でも貴方變な顔をするのね!。……さあ貴方がたにお茶でも入れませう、それから私にも、もしお許しが出るのなら。

アナトール どうぞ……



マクス　ね、イローナ、折角だが一緒に茶を飲んでゐる譯には行かないんだ……それに分らないのは……

イローナ　(サモワールの所へ行つてこそそそやつてゐる) 何が分からないの？

マクス　實はアナトールも是非……

イローナ　アナトールが是非どうつていふの——？

マクス　(アナトールに) まつたく君はもう是非——

イローナ　是非どうしろつていふのよ？

マクス　君はもう是非仕度をしなくつちや！

イローナ　あら、マクスそんな馬鹿なことを言ふもんぢやなくつてよ。今日は二人で家うちにゐるんです、一歩ひとあしも外へは出ないの……

アナトール　ね、おい、ところが生憎さういふ譯には行かない……

イローナ　あら、さういふ譯に行きますとも。

アナトール　俺は招待されてゐる……

イローナ　(茶を注ぎながら) おことわんなさい。

マクス　断ことわる譯に行かないんだ。

アナトール　俺は結婚の式に招待されてゐる。

マクス　(彼を勵ます様な合圖をする)

イローナ　あら、そんならなんでもないぢやありませんか。

アナトール　なんでもなかない——俺は言はば介添カウソウ役カクヘキなんだから。

イローナ　貴方の「夫人」つていふのは、貴方を愛してゐるの？

マクス　そんなことこそ問題にやならないぢやないか。

イローナ　でも私はこの人を愛してゐます、それが一番大事な事です……貴方そんなに口を出すのはよして頂戴！

アナトール　ね、俺には義理がある。

マクス　さうだ、義理があるんだ——本當だよ——行かなけりや義理が缺ける。

アナトール　二三時間お暇ひまを貰ふよ。

イローナ　まあ、どうぞ、おかけなさい……砂糖は幾つ、マクス？

マクス　三つ。

イローナ　(アナトールに) 貴方は……

アナトール　まつたく時間が迫つてゐる。



イローナ 幾つ？。

アナトール 知つてるぢやないか……いつも二つだよ——

イローナ クリーム、ラム？。

アナトール ラム——それも知つてゐる癖に！。

イローナ ラムと砂糖二つ。(マクスに)この人には主義があるのよ！。

マクス 僕は行かなくつちやならない！。

アナトール (小聲で)僕を置いて行くのかい？。

イローナ マクス、お茶を飲んでお仕舞ひなさいよ！。

アナトール おい、俺は是から衣物を換へるよ——！。

イローナ あら、ほんと——一體その可厭な結婚つていふのはいつあるの？。

マクス もう二時間すると。

イローナ 貴方も招待されてゐる？。

マクス ああ！。

イローナ やつぱり介添役？。

アナトール さうだよ……この人も。

イローナ 一體誰が結婚するの？。

アナトール お前の知らない人。

イローナ なんていふの？。秘密つて譯でもないんでせう。

アナトール 秘密なんだよ。

イローナ なんですつて？。

アナトール 結婚の式は秘密に擧げられる。

イローナ 介添役の男の人と女の人とが行つて？。そんな譯のわからない事つてあるもんですか。

マクス 親達にだけなんにも知らせない様にしてある。

イローナ (自分の茶を啜りながら、落ちついて)二人して私を誤魔化すのね。

マクス、 どういたしまして。

イローナ 今日貴方がた何所へ招待されてゐるんだか分かつたもんぢやないわ！……でも私行かせやしない。——マクスさんは、無論好きな所へ何所へでもいらしつて下さい——然し其所のその人は残るんです。

アナトール どうして、どうして。俺は親友の結婚式に缺席することは出来ない。

イローナ (マクスに)この人に賜暇をやつた方が可いの？。



マクス さうだ、さうだ、イローナ——是非やるが可い——  
イローナ その結婚式は何所の教會でするの？

アナトール (不安げに) どうしてそんなこと聞くんだ？

イローナ 私せめて見るだけでも見て置きたいから。

マクス そりや駄目だ……

イローナ どうして駄目なの？

アナトール どうしてつて、その結婚式は深い……深い地下室の禮拜堂であるんだから。

イローナ でも道がついてゐるんでせう？

アナトール なあに……といふのは——勿論道はついちやゐるんだがね。

イローナ 私貴方の「夫人」が見たいのよ、アナトール。本當のところ私その「夫人」が妬けるの。——自分の「夫人」と後になつて結婚する介添役の話がよくあるぢやありませんか。そして、

アナトール、貴方は知つてゐるでせう、——私は貴方に結婚させたくないの。

マクス ぢやどうするの……若しこの人が結婚したら？

イローナ (ひどく澄まして) 結婚式の邪魔をしてやるわ。

アナトール ——さうかい——？

マクス どういふ風にして？

イローナ まだきまつてゐないの。でもまあ大抵教會の入口で大騒ぎするわ。

マクス そりや月並だ。

イローナ あら、私ちやんと新らしい陰影ニユアンスをつけてよ。

マクス 例へば？

イローナ 私も同じ様に花嫁になつて馬車で乗り込むの——ミユルテの冠をつけて——奇抜ぢやないこと？

マクス 素晴しく……(立上がる) もう行かなくつちや。……アナトール、左様なら！

朝の式 結婚  
アナトール (立上がる、思ひきつて) イローナ、御免よ、もう著換へをしなくちやならないんだから——時間が切迫してゐる。

フランツ (花束を持つて這入つて来る) 旦那様、花が。

イローナ なんの花？

フランツ (イローナを驚ろいた然し多少親しみを持った顔つきで眺める)……旦那様、花が。

イローナ 貴方はまだフランツを使つてゐるの？。(フランツ去る) 追ん出さんだつて言つてゐたんぢやないの？



マクス　なかなかさう手軽には行かないものさ。

アナトール　（絹紙に包んだ花束を手にとる）

イローナ　拜見、貴方はどんな趣味を持つてゐるんだか！

マクス　「夫人」へやる花束なのかい！

イローナ　（絹紙を叩き返す）こりやお嫁さんにやる花束ぢやありませんか！

アナトール　おやつ、ぢや俺の所へ間違へて持つて来たんだな……フランツ、フランツ！（大急ぎで花束を持つて去る）

マクス　可哀想に、お婚さんの所へあの男の花束が行つてゐる。

アナトール　（又這入つて来る）今あいつ騙出して行つたよ、フランツが——

マクス　ぢや僕は是で失禮する——行かなくつちやならない。

アナトール　（扉口へついて来て）どうしたら可いだらう。

マクス　白状するさ。

アナトール　そいつあ。

マクス　それぢや、兎も角僕がもう一度来るよ、大急ぎで行つて来て——

アナトール　お願ひだ——どうか！

マクス　それで僕の色は……？

アナトール　藍か紅か——なんとなくそんな気がする——失敬——

マクス　さやうなら、イローナ！——（小聲で）一時間以内には来るよ！

アナトール　（部屋へ歸る）

イローナ　（彼の腕の中に跳り込む）やつと！ほんとに、なんて私は幸福なんでせう。——

アナトール　（器械的に）可愛い！

イローナ　どうして貴方はそんなに冷たいの。

アナトール　たつた今さう言つたぢやないか、可愛いつて。

イローナ　でも貴方は本當にその下らない結婚式へ出なくちやならないの？

アナトール　ねえ、おい、眞面目な話、俺は出なくつちやならないんだよ。

イローナ　ねえ、私貴方の馬車に乗つて、貴方の「夫人」の家迄ついで行つても可いでせう……

アナトール　何を言つてゐるんだね。今夜又會はうよ、お前だつて今日芝居に出なけりやならない。

イローナ　私休むわ。

アナトール　いけない、いけない、迎ひに行つてあげるよ。——是から俺は燕尾服を着る。（計



時を見る。時間の早く立つことつたら。フランツ、フランツ!

イローナ 貴方どうするの?

アナトール (這入つて来るフランツに) 俺の部屋に何もかも揃へたか?

フランツ と仰しやるのは、燕尾服と白の襟飾と——

アナトール うん、さうだよ、——

フランツ 唯今——(寢室へ)

アナトール (あるき廻はる) ねえ——イローナ——ぢや今夜——芝居がはねて——ね——?

イローナ 私是非貴方と一緒に家にみたいんだけど。

アナトール そんな子供みたいなことを言ふんぢやない——俺にだつて義理といふものがある——

——お前はそれが分からないのか?

イローナ 私は貴方を愛してゐるの、その外のことは私にはなんにも分からない。

アナトール 然しそれはどうしても必要な事だよ。

フランツ (寢室から出て来て) 旦那様、すつかり揃へました。(去る)

アナトール よし。(寢室に這入る。イローナ舞臺にゐる、扉の奥で彼は話を續ける) といふのは、さういふ事が分かつて置くといふことが、どうしても必要だと言ふのだ。

イローナ それぢや貴方本當に著換へてゐるの?

アナトール でも此儘ぢや結婚式に出られない。——

イローナ どうしてまた貴方は出るの?

アナトール 又始めるのか?。俺には義理がある。

イローナ ぢや、今夜。

アナトール あゝ。舞臺口で待つてゐる。

イローナ 遅れちやいけないことよ!

アナトール 大丈夫——遅れる筈がないぢやないか?

イローナ ところが、覚えてるでせう、一度なんぞ芝居がはねてから丸一時間も待たされちやつた。

アナトール さうかい?。覚えてゐないな。

(間)

イローナ (部屋の中をあちこちとあるく、天井や壁などを眺める) ねえ、アナトール、貴方又繪を買つたのね。

アナトール あゝ、どうだい?

イローナ 私繪のことなんか些とも分からないの。



アナトール　そりや大變好い繪なんだよ。

イローナ　貴方是を持つて來たの？。

アナトール　といふのは？。何所から？。

イローナ　ほら、旅からよ。

アナトール　さうだ、その通りだ、旅から。いやさうぢやない、そりや人から貰つた物なんだ。

(間)

イローナ　ねえ、アナトール。

アナトール　(へいらいらして)なんだい？。

イローナ　一體貴方何所へ行つてたの？。

アナトール　もう言つて聞かせたぢやないか。

イローナ　いいえ、些とも。

アナトール　ゆうべお前に言つて聞かせたよ。

イローナ　それぢや私忘れて了つたわ！。

アナトール　俺はボヘミアの近くにゐたんだ。

イローナ　貴方ボヘミアに何の用があつたの？。

アナトール　ボヘミアぢやない。ボヘミアの近くだ——

イローナ　あらさう、貴方屹度獵によばれたんでせう。

アナトール　さうだ、兎を撃つたよ。

イローナ　六週間も？。

アナトール　あゝ、のべつに。

イローナ　どうして貴方は私に左様ならを言はなかつたの？。

アナトール　お前に厭な思ひをさせたくなかつたから。

イローナ　ね、アナトール、貴方は私を置いてけぼりにするつもりだつたんでせう。

アナトール　冗談を。

イローナ　でも、先にも一遍やりかけたんぢやありませんか。

アナトール　やりかけた——さうさ、然し巧く行かなかつた。

イローナ　なんですつて？。貴方なんて言つたの？。

アナトール　さうさ。俺はお前と切れようとしたつて言ふんだよ、お前も知つてゐるぢやないか。

イローナ　なんだ下らない、切れようつたつて切れられるもんですか！。

アナトール　はは！。



イローナ　なんて言つたの？。

アナトール　はは、つて言つたんだよ。

イローナ　貴方、笑へた義理ぢやないぢやないの、あの時だつても歸つて來たくせに！。

アナトール　さうさ——あの時はね！。

イローナ　今度だつて——何しろ貴方は私を愛してゐるんだから。

アナトール　お生憎さま。

イローナ　なんですつて——？。

アナトール　（大声で）お生憎さま！。

イローナ　貴方、貴方は隣の部屋にゐると馬鹿に元氣が好いのね。面と向かつちや私にそんなことは言へない。

アナトール　（扉を開けて顔を出し）お生憎さま。

イローナ　（扉の傍へ行き）そりやどういふこと、アナトール？。

アナトール　（又扉の奥にて）何時までもさうは行かないといふことさ！。

イローナ　なんですつて？。

アナトール　いつまでもさうは行かないといふのだ、いつまでも續く譯がない。

イローナ　今度は私が笑ふわ。はは。

アナトール　なんだつて？。

イローナ　（扉を引き明ける）はは！。

アナトール　締めろ！。扉再び締まる！

イローナ　駄目ですよ、貴方は私を愛してゐるんだもの、私を捨てることなんか出来やしない。

アナトール　お前さう信じてゐるのかい？。

イローナ　私にはちやんと分つてる。

アナトール　お前にちやんと分つてる？。

イローナ　私さう感じてゐる。

アナトール　ぢやお前は、俺が永久にお前の足元に平伏してゐるものと思つてゐるのだね？。

イローナ　貴方は結婚しやしない——私にはちやんと分つてる。

アナトール　おい、お前氣でも狂つたのか。俺はお前を愛してゐる——そりやなるほど結構なこ

とに違ひない——然し俺達は永久に結びつけられてゐる譯ぢやない。

イローナ　私が貴方を放すと思つて？。

アナトール　然し一度はお前も厭でも放さなくつちやならない。



イローナ 厭でも？。そりやいつの事？。

アナトール 俺の結婚の時は！。

イローナ (指で拍子をとつて扉を叩きながら) 貴方、ぢやそれは何日の事なの？。

アナトール (嘲りを帯びて) もうぢきだよ！。

イローナ (興奮して来る) いつ？。

アナトール かたかたいはせるな。一年内にはもう結婚してゐる。

イローナ 馬鹿！。

アナトール 二ヶ月内にでもしようと思へば出来る。

イローナ もう一人待つてゐるんでせう。

アナトール さうさ——今——此瞬間に一人待つてゐる。

イローナ ぢや二ヶ月内に？。

アナトール お前は本氣にしてない様だな……

イローナ (笑ふ)

アナトール 笑ふんぢやない——俺は一週間内に結婚する！。

イローナ (餘計聲高に笑ふ)

アナトール イローナ、笑ふんぢやない！。

イローナ (デイヴンの上に笑ひこける)

アナトール (扉口に燕尾服で現はれながら) 笑ふんぢやない！。

イローナ (笑ひながら) 貴方いつ結婚するの！。

アナトール 今日。

イローナ (彼の顔を見て) いつ——？。

アナトール 今だよ。

イローナ (立上がる) アナトール、冗談はよして頂戴！。

アナトール おい、眞面目だよ、俺は今日結婚する。

イローナ 貴方氣が狂つたんぢやない？。

アナトール フランツ！。

フランツ (来る) 御用で——？。

アナトール 花束！。(フランツ去る)

イローナ (威喝する様にアナトールの前に立つ) アナトール……！。

フランツ (花束を持つて来る)



イローナ　（振向いて、聲をあげて花束を目がけて飛びかかる。アナトールすばやくそれをフライングの手から取る。フライングはにやにやしながら徐かに去る）

イローナ　あら!!。——本當なのね。

アナトール　御覽の通りだ。

イローナ　（彼の手から花束をもぎ取らうとする）

アナトール　何をするんだ?。（彼は身をかはして逃げる。女は部屋中彼を追っかけまはす）

イローナ　あんまりだわ、あんまりだわ!

マクス　（薔薇の花束を手に持つて這入つて来る。喫驚して扉口に立ち止まる）

アナトール　（椅子の上に逃げて、花束を高く宙に差し上げてゐる）マクス、助けて呉れ!

マクス　（イローナの所へかけ寄つてひきとめる。女は彼の方へ向き直はり、花束を捻ぢとつて、それを床の上に投げ棄てて踏みつける）

マクス　イローナ、気が狂つたのか。私の花束を!。どうしたら可いだらう!

イローナ　（わつと泣き出して椅子の上に倒れる）

アナトール　（椅子の上で面喰つて、どぎまぎしながら）あいつが僕を怒らせたんだ。……さうだ、イローナ、今お前は泣いてゐる。……當り前だよ。なぜさつき笑つた。……あいつがね、僕を

愚弄したんだよ——ね、マクス。あいつがさう言つた。……僕には結婚する勇氣はないんだつて。……さあ。……俺は結婚するぞ勿論——つらあてに。（椅子から下りようとする）

イローナ　誤魔化し、嘘つき。

アナトール　（又椅子の上に立つ）

マクス　（自分の花束を拾ひ上げる）おやおや!

イローナ　私あの人のだと思つたんだわ。でも貴方だつてその位のことされても可い。ぐるになつてゐるんだから。

アナトール　（椅子の上に立つた儘で）もう大人しくしろ。

イローナ　さうよ——貴方がたは自分で人を氣狂の様にしときながら、いつでもそんなことを言ふんだわ!。でも見てゐらつしやい!。素敵な結婚式にしてあげるから!。待つてるが可い。……（立上る）ぢや一寸失禮!

アナトール　（椅子から飛び下りて）何所へ——?。

イローナ　今に分かつてよ。

アナトール

マクス　何所へ?。



イローナ やつて頂戴！

アナトールとマクス (出口を塞いで) イローナ——どうしようつていふの——イローナ——どうしようつてんだ——？

イローナ 放して！……やつて頂戴。

アナトール 馬鹿な真似をするんじゃない——落ちつくが可い——！

イローナ 貴方がたは私を出さないのね。——出さないの…… (部屋の中を駆け廻り、腹立紛れに茶の道具を卓から投げ落す)

アナトールとマクス (途方に暮れる)

アナトール ぢやお前に訊くがね——うんと愛しられてゐて、やつぱり結婚する必要があるのかい——。

イローナ (デイワンの上に突つ伏して泣く。間)

アナトール やつと落ちついた。

マクス 出かけなくつちや……然も僕は——花束なしで。——

フランツ (来る) 旦那様、お馬車が参りました。(去る)

アナトール 馬車が……馬車が——どうしたら可いだらう。(イローナの後に寄つて行き髪の毛

にキスしながら) イローナ！——

マクス (反対の側から) イローナ——(女はハンケチを顔に當てて静かに泣き續けてゐる)

兎も角君は行きたまへ、あとを僕に任せて。——

アナトール まつたく僕は行かなくつちやならない——然しどうも僕が……

マクス 行きたまへ……

アナトール 君に女を歸すことが出来るかな？

マクス 僕は君のために式の済むまでに話をつけて置く。……「すつかりきちんと」。

アナトール 心配だなあ——！

マクス 可いから行きたまへ。

アナトール ああ……(向うをむいて行かうとする、又爪先立てて歸つて来て、イローナの髪の上をそつとキスをして慌ただしく去る。)

マクス (イローナの眞向ひにかける。イローナはまだハンケチを顔に當てて泣き續けてゐる。)

(時計を見る) ふむ、ふむ。

イローナ (夢から覺めた様に、身の廻りを見廻はす) あの何所へ行つた……

マクス (女の両手をとつて) イローナ……



イローナ (立上がりながら) あの人何所へ行つた……

マクス (女の手を離さずに) さがしたつて見つかりつこはない。

イローナ それでも私目つけるわ。

マクス イローナ、君には分別がある筈だ、まさか騒ぎを起さうと思つてゐるんぢやあるまいね……

イローナ 放して下さい——

マクス イローナ!

イローナ 式は何所であるの?。

マクス そんなことはどうでも可い事だ。

イローナ 私行きたい、行かなけりやならない!

マクス そんなことをするんぢやない。……何を思ひ出したんだね!

イローナ こんなに侮辱されて!。……こんなに騙されて!

マクス いや侮辱されたのでも、騙されたのでもない、——かういふのが即ち人生なんだ!

イローナ よして頂戴——よして——そんな文句は。

マクス 馬鹿だな、イローナ、何をしても無駄だといふことが分かりさうな筈なのに。

イローナ 無駄——?。

マクス そんなこと愚な話だ……

イローナ 愚な話!。——?。

マクス 人の笑ひものになるだけの話なんだから。

イローナ なんですつて——この上また笑ひものにされる!

マクス 諦めるが可い!

イローナ ああ貴方は私を些とも御存知ないのね!

マクス それぢや、もしあの男がアメリカへ行つたのだとしたら?。

イローナ といふのは?。

マクス 君にとつてあの男が本當にゐなくなつたとしたら!

イローナ そりやどういふこと?。

マクス 大事な問題はかういふこと——「欺された女」は君ぢやない!

イローナ ……?。

マクス 君の所には歸つて来るかも知れない、が向うの女は棄てられるかも知れない!

イローナ あら……もしさうだつたら……(荒い歡ばしげな表情を顔色に漂はせて)

マクス 君にとつてあの男が本當にゐなくなつたとしたら!

イローナ そりやどういふこと?。

マクス 大事な問題はかういふこと——「欺された女」は君ぢやない!

イローナ ……?。

マクス 君の所には歸つて来るかも知れない、が向うの女は棄てられるかも知れない!

イローナ あら……もしさうだつたら……(荒い歡ばしげな表情を顔色に漂はせて)